
失われた七年

けっぱ まさかず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた七年

【Nコード】

N9410G

【作者名】

けっぱ まさかず

【あらすじ】

時は世紀の節目の二〇〇一年。「平成不況」、「就職氷河期」と言われた時期に就職活動をする一人の青年がいた。その名も結羽正和。運良くT社への入社が決まり、そこで待ち受けていたものは、人事異動、官僚的な組織、そして上司・同僚との不協和音……。ストレスと闘う毎日が続いた。そんな中でも花が開いた社内恋愛。しかし、やがて別れの時が訪れてしまうのであった……。今を生き抜くサラリーマンであれば、誰もが経験する喜びと苦しみを再現した、フィクション半分、ノンフィクション半分のドキュメンタリー的サ

一の（一） 就職活動

一

時は世紀の節目の二〇〇〇年。ノストラダムスの一九九九年七月世界滅亡という大予言が外れ、コンピュータが誤作動する恐れがあるという二〇〇〇年問題もそれほど大きな問題とはならなかった。二千年紀の記念として「ミレニウム」という言葉が流行し、新紙幣「二千円札」が発行されるなど、表面的には華やかな年であった。しかし、日本は一九九一年のバブル経済崩壊の後遺症に苦しみ、二〇〇二年まで続いた平成不況は後に「失われた一〇年」と呼ばれるようになった。二〇〇一年は不況が始まってちょうど一〇年目の「末期」であったが、当時の人々は出口の見えない不況に疲弊し、元氣も希望も持てない日々が続いていた。

そのような時代背景の中、一人の青年が就職活動をしていた。彼の名は結羽正和。NK大学工学部を卒業し、そのまま同大学院修士課程に進んでから一年が経とうとしていた。修士課程は二年間なので、博士課程に進むか就職するかどちらかを選ばなくてはならない。しかし、結羽は博士課程に進む気はなかった。「博士」というのは、自分よりもっと頭のいい人になるものだと思っていたからである。理系では、数学ができる人が本当の意味で頭の良い人だという考えを持っていた。結羽も大学の工学部に入学したくらいなので、少なくとも高校までは数学が得意だった。しかし、高校までの数学は公式が使いこなせればOKだが、大学では微分方程式などを自ら作り、自ら解かなければならず、結羽にはそれができなかった。だから、自分は博士課程を進む器の人間ではないと思ったし、そもそも自分は研究職が合っていないと考えていた。

となると、残る選択肢は「就職」ということになるが、二〇〇一年は長引く不況の影響で求人が少なかった。R社調べの大卒有効求人倍率は一・三三で、これはバブル期の半分であったが、一を超え

ているということは、頑張れば何とか就職できることを意味していた。実際、残念ながら希望通りの会社に就職できなかった先輩はいたが、どこにも就職できずに浪人になってしまった人は一人もいなかった。

しかし、結羽は何を基準に会社を選べば良いのか全くわからなかった。大学であれば、予備校の模擬試験を受けると自分の偏差値がわかるので、その偏差値付近の大学を選べば良かった。学部・学科は自分で選ぶ必要があったが、医者になれるほど頭が良いとは思わなかったし、死や病気のことは考えたくもなかった。医学部や薬学部という選択肢は最初からなかった。そうすると、理系なら工学部を選ぶのが無難だろうと思った。学科を選ぶのは少し難しかったが、鉄橋やビルなどの巨大構造物には興味がなかった。建築・土木系は除外。電気は高校の物理でよくわからなかったし、機械も自分が歯車に油を差している姿がイメージできなかった。化学も高校で亀の甲（ベンゼン環）が出てきた段階でよくわからなくなってしまった。こうなると、工学部で選ぶ学科がなくなってしまったようにも思えたが、NK大学には「材料工学科」という学科があった。世の中のすべてのものは材料から成り立っているわけだから、ここに行けば世の中の役に立てるかもしれない、という漠然な想いからこの学科を選んだのであった。

材料工学科出身となれば、就職先としては素材メーカーが第一候補に挙がる。実際、いくつかの会社から求人が来ていたが、その数は少なかった。むしろ、求人が多いのは素材を加工して製品に仕上げるメーカーからのものであった。その中でも、自動車メーカーからの求人が多かった。二〇〇一年は確かに不況ではあったが、自動車業界は輸出の依存率が高く、中国やインドなどの新興国向けに販売量を伸ばしつつあり、当時は他の業界に比べると業績回復の兆しが見え始めたと言われていた時期でもあった。しかし、自動車業界は「コネ」の世界があり、実際に自分の父親から採用の内定をもらったという学生もいた。そんな会社は、出世するにも「コネ」が必

要になるんだろうなあ、と思うと、そんな会社に入社する気は全く起こらなかった。

「さて、どうしたものか」と思いながら、結羽はぼーっと新聞の株価のページを見ていた。東証第一部だけでも一五〇〇もの企業の名前が並んでいる。その横に株価が載っているが、大学の偏差値とは違って、その数字が大きければ良い会社で、小さければ悪い会社というわけではないので、何の参考にもならなかった。まさか、どこかのテレビ番組のように、この新聞を壁に貼って、ダーツが刺さった会社を受けるというわけにもいかない。人生の岐路である「就職」についてはもっと真剣に考えて決めないといけないような気がしたが、何を考えれば良いのかさえわからなくなってしまい、ただん憂鬱になっていく自分がいるのを感じていた。

しかし、大学院の博士課程に進む気がないのであれば、就職するしかない。仕方がないので、新聞の株価のページを閉じ、自分のやりたいことは何だろうと自問自答してみた。結羽はパソコンや家電などのデジタル製品が好きだった。Windows 95が出た頃は、パソコンを買う用事もないのに、最新機種のCPUがどのくらい性能向上したかを調べに、よく電気街へ足を運んでいたくらいだ。大学に來ている求人票を見ると、S電機のものがあった。S電機はどこちらかというと欧米型の会社で、年功序列の制度を廃止し、いち早く成果主義を導入した会社であった。ここなら、自動車業界のような「コネ」もないだろうなあ、と好感を持った。しかし、S電機は電気工学科出身の人もたくさん受けに来るだろうし、選考の開始時期が遅かったなので、その前に他の会社も受けておかないと不安であった。

そこで、素材メーカーの求人票も手にしてみた。一応、材料工学科を卒業するのだから、素材メーカーを考えないのもおかしいと思っただからである。先述の通り、素材メーカーからの求人は少なかったが、その中でKC社に目が止まった。ここは、元々はC素材の製造一筋で事業を行っていたが、最近ではC素材を利用した電子製品も

製造するようになり、最近では携帯電話の販売が好調とのことであった。早速、結羽は会社説明会へ足を運んでみた。やはり、最新の携帯電話の話が中心であった。「弊社に入社すれば、このような開発ができます」と、人事担当者らしき人は一生懸命説明していたが、結羽は何故かピンと来なかった。一つは、開発部署が本社ではなく、一〇〇〇キロも離れたところにあるということであった。N市生まれの結羽は、何となく地元で働きたいと思っていた。もう一つは、KC社の説明会の中で紹介された最新技術の話が、携帯電話しかなかったことだった。携帯電話は大学一年生の時から持っていたので、その便利さはよく知っているのだが、高校三年生の時に持っていたポケットベルは既に見かけなくなっていた。したがって、今後の通信技術の進歩によっては、携帯電話もなくなってしまうかもしれないのだ。携帯電話の次の世代の通信機器の話もあれば魅力的に感じただろう。しかし、携帯電話の話しかなかったことに、少し落胆してしまったのであった。結羽は、とりあえずこの会社を「第二志望以下」ということにして、他の会社を探すことにした。

結羽の「第一志望」の会社というのはどこにあるのだろうか。S電機はKC社よりも選考が遅いので、それまで何もしないというわけにはいかなかった。改めて求人票を眺めてみると、一つの会社のところで手が止まった。T社である。T社は国内あるいは海外で作られた製品をカスタマイズし、それをメンテナンスサポート込みで顧客に販売するビジネスを展開していた。業界では大手二社から離れた三番手であったが、従業員数は約三〇〇〇人で、会社としては中堅規模といった感じであった。メーカーとユーザーの橋渡しの仕事も、研究開発が自分には合っていないかな、と思っていた結羽にはちょうど良いような気がした。選考の時期もKC社やS電機よりも早かったので、結羽はとりあえず履歴書をT社に送ることにした。

そんな中、J鉄道からの求人が来た。自動車なら個人が買うものなので、色々なデザインの車があるのは当然だと思われるが、鉄道

会社が買う列車はもつと無個性であつてもいいのに、同じ通勤電車でも色々なところに違いがあるのは面白いなあ、と思つていた。また、鉄道は多くの人をあらゆるところへ運ぶ使命を持つており、そんな社会基盤を支える仕事はカッコイイなあ、と思つたりもした。最近では、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出量が、自動車や航空機と比べて少ないとPRしている点も好感を覚えた。早速、J鉄道に履歴書を送ると、先方からすぐ連絡があり、N駅にあるホテルのロビーに来るように言われた。ロビーへ行くと、J鉄道の社員がいて、その隣にある喫茶店で一時間くらい話をした。どうやらJ鉄道では会社説明会の代わりに社員が直接学生に説明するというスタイルを取っているようで、S車両区に所属しているというその社員は、事故や悪天候でダイヤが乱れたときに、翌朝までに列車を元通りにしなければならぬ時の苦労話など、色々な話をしてくれた。最後に、書類選考が通つたら次の面接試験の連絡をすると言われ、その社員と別れた。しかし、J鉄道からの連絡が来ることはなかった。おそらく社員と会つたときに採点されていたのであろう。残念だつたが、仕方がなかった。

ついでに、鉄道車両を作っているNS社の求人にも目を通してみた。応募資格の欄に「機械系または電気系工学科を卒業または卒業見込みの者」と書いてあつた。この時点で結羽には応募資格がなかったのである。実際、機械系や電気系と比べると、結羽が所属している材料工学科の求人は少なかった。有効求人倍率は先述の通り一・三三であつたが、手元にある求人数を数えてみると、一を超えなかつた。超えないかの数しかなかった。世の中のすべてのものは材料から成り立っているから応用も利くはずだと思つて材料工学科を選んだが、学問としては「広く、浅く」になつてしまったため、他の学科と比べると専門性が低いようにとらわれがちであつた。改めて大学の偏差値を見てみると、同じNK大学でも材料工学科は他の学科よりも値が低かつた。結羽は「そういうことだったのか」と今頃になつてその理由がわかつたような気がしたが、だからと言って今さら学歴を

変えることはできないこともわかっていった。

一の（二） 就職活動

「鉄道の社員と会ってから一週間が過ぎた頃、Ｔ社から一次面接の案内が来た。念のためＴ社の募集資格を確認してみたところ、「化学・材料・機械・電気・建築／土木・情報」となっていた。「材料」の二文字を見て、結羽は「いいぞ、いいぞ」と思った。少なくとも、材料工学科が不利になることはないと思ったからである。慣れないスーツを着て、Ｔ社の本社へ向かった。

面接会場へは、結羽の他にもう一人の学生と一緒に入った。会場には三〇代前半と思われる面接官が座っていた。面接官一人に対して応募者二人の面接であった。まず、面接官から自己ＰＲをするように言われた。結羽は自分の名前と大学の学部・学科を言い、履歴書に書いた自分の長所について話した。そして、隣の応募者の番になった。すると、彼は突然

「私はカメレオンです。」

と言った。その後、自分はどんなことでも臨機応変に対応でき、相手にも合わせることができるので、変幻自在という意味でカメレオンだと思う、というような説明をした。その後もＴ社の志望動機や学生時代に力を入れたことなどについて質問されたのだが、結羽はどうしても普通の答えしかできないのに対して、もう一人の応募者は例え話を連発して面接官の興味を引いているようであった。最後に、結羽は面接官に

「君はもう少し元気があると良いね」

と言われた。この時点で、結羽は「これは駄目だな」と思ったが、カメレオン氏の受け答えも気に入らなかった。世の中には「面接マニユアル」という本がありふれているので、おそらくカメレオン氏がとった行動もどこかに書いてあるのだろう。結羽は、「そんな行動の方が評価される会社であれば、こちらから願い下げだな」と思った。

一週間ほどすると、T社から二次面接の案内が来た。面接官の最後の言葉から絶対に駄目だと思っていた結羽にとっては、とても意外であった。二次面接の会場へ行ってみると、そこにはカメレオン氏の姿はなかった。もちろん会社がカメレオン氏を呼ばなかったのか、それともカメレオン氏が他の会社を受けるために来なかったのかはわからなかったが、何となく嬉しかった。しかし、T社に来る前に、またもや奇妙な光景を目にしまったのである。二次面接では本社ではなく研究所に来るように言われた。他社の製品をカスタマイズしているT社では、そのカスタマイズの方法を研究所で開発しているとのこと、それを見学させてもらえるということであった。T社の研究所は郊外にあるので、N鉄道のS駅に。時。分に到着する電車に乗るように言われたのである。結羽も当然その電車に乗った。S駅に近づくにつれて、自分と同じようにスーツを着た人を多く見るようになり、T社の応募者であることは一目瞭然であった。しかし、よく見ると全員何か本を読んでいるのである。それは、T社にも関連のある業界の本で、一生懸命企業研究をしているという感じであった。結羽は「面接のマニュアル本の次は業界本か」と思ったが、何も勉強していない自分もどうかという思いを持ってしまったのも事実であった。

そんな想いのままT社の研究所に到着し、待合室のようなところに案内された。どうやら、二つのグループに分け、一つが面接をしている間にもう一つが研究所の見学をし、それが終わったら交替するということであった。結羽は先に見学するグループに入った。研究所には家電メーカーのP社の製品や、M重工の巨大なエンジンが置いてあり、社員が一生懸命作業をしていた。その一つ一つが各社の最新機種であり、それを触ることができる社員が羨ましく思った。同時に、それまでT社の事業内容がよくわからないままに応募していた結羽にとっては、業界本なんか読むよりも多くのことを知ることができ、とても勉強になった。その後行われた面接は、一次面接とは違って面接官二人、応募者一人であったが、逆にカメレオン

氏のような人が横にいない方が話しやすかった。先に見学させていたおかげでT社でやりたいことがクリアになったような気がして、それをストレートに面接官に話すことができた。もし先に面接を行うグループに入っていたら、こんなに面接で話すこともできなかったと思うと、人生は些細なことで変わってしまうのかもしれない、と思ったりもした。

その見学の際に、一人の応募者が声を掛けてくれた。彼はO大学の関口と名乗った。他の応募者は面接前の緊張のせいか、見学中も話すことはなく、面接を待つ間も例の業界本を一生懸命読んでいた。しかし、結羽も関口もあまり緊張していなかったため、二人は社員の人にいるいろいろ質問したり、話を聞いたりした。また、お互い業界本の類も持っていなかったため、普段の卒業研究のことなど、たわいのない話もした。帰り際にメールアドレスを交換したが、結羽は彼と一緒にT社へ入社できるといいな、と思った。

さらに一週間ほどすると、T社から最終面接の案内が来た。関口に連絡すると、彼も案内をもらったとのことであったが、呼ばれた時間が違っていたので会うことはできなかった。しかし、お互いの健闘を祈ろうということで、最終面接に臨んだ。最終面接は役員と人事部長が面接官ということもあり、「長所と短所を二つずつ教えて下さい」など、答えに窮する質問が多くあったが、何とか答えることができた。そして、一週間後にT社の入社内定の通知を受け取ることができた。このときも関口に連絡をしたが、彼も内定をもらったとのこと。この時点では好感度の良い会社に、気の合いそうな関口と入社できると思うと、結羽は嬉しい気持ちになった。

T社の内定を受け、まだ採用試験が始まっていない素材メーカーのKC社と電機メーカーのS電機への受験をやめることにした。後から思えば、これらの会社も受けてみて、内定をもらった会社の中から選んでも良かったのだが、その時は、T社で働くことばかりを夢見ていたし、これらの会社を受ける意味を見いだせなかった。

T社の内定が決まってから一ヶ月後、T社から「内定者の集い」

という案内が来た。内定式は一月一日とまだまだ先であったが、おそらく他社と天秤に掛けている人に対して、T社の好感度や志望度を上げてもらうために開催されたものだった。しかし、T社以外に内定をもらっていない結羽は、何も考えずにその集いに参加した。久しぶりに関口に会えるのも楽しみだった。会場に入ると、数名の内定者が座っていたが、関口の姿はなかった。仕方がないので、近くの内定者としてしばらく話していたが、結局関口は来ないまま会食が始まった。驚いたのは、昼食にもかかわらずいきなりビールが出てきたことだった。ドイツ人であれば昼からビールを飲むかもしれないし、フランス人であればワインを飲むかもしれない。結羽はお酒が好きだったが、社会人ともなると昼間からお酒を飲むのかとちょっとびつくりした。しかし、もつとびつくりしたのが、周りの内定者である。皆が皆「俺が俺が」という感じで、とにかく目立ちたがり屋ばかりなのである。会社主催の会食が終わった後、二次会も行ったのだが、勝手に仕切っている人が複数いて、結羽はそれについていくだけだった。結羽は明るい性格で、大学の研究室でもゼミ旅行などを企画するのは結羽の役割だった。その結羽が埋もれてしまいうくらい強烈な人間が集まっているのだ。女性も四人いたが、それぞれに強烈な個性を持っていた。結羽は急に心配になった。

「この人たちと一緒にやっていけるだろうか。」

しかし、今さらKC社やS電機を受けるわけにはいかなかった。内定者の集いが行われた日には、もう面接試験が始まっていたからである。T社の目的の一つに他社の面接試験を受けさせないというものもあったようで、実際その日は公務員試験が行われていたことが後になってわかった。関口に連絡すると、彼はK電力の内定をもらってそちらに入社することを決めたとの返事が返ってきた。関口が思わず、目立ちたがり屋の集団の中で仕事をしていかなければならないと思うと気分は沈んでしまい、T社の思惑とは逆に、好感度が下がっていくのを感じたのであった。

七月頃にもう一つの事件が起こった。事件というと大げさかもし

れないが、結羽は内定者の中野という男と岡本という女に呼ばれて、一緒に飲んでいた。中野と岡本がたまたまNK大学の近くで会ったので飲むという話になり、NK大学なら結羽がいるはずだということと呼んだらしい。結羽は断る理由もないので、指定された居酒屋へ行った。事件が起こったのは、店を出た後であった。突然、中野が結羽の研究室を見てみたいと言い出したのだ。結羽は「他の学生もいるからやめろよ」と言ったが、そんなのもお構いなしで、中野と岡本はNK大学の正門を守衛の許可なしにくぐり抜け、結羽の研究室に入ってきたのであった。そこには五人ほどの学生がいたであろうか。酔っぱらっている中野と岡本は「どんな研究をやっているのかなあ」と大声で叫びながら、勝手にパソコンのモニターを覗いたり、レポートを読んだりしていた。十分ほどすると飽きてきたのか、「じゃあな」と言い残し、二人は研究室を出て行った。研究室で仲の良かった津川から

「あれは誰？ 知り合いか？」

と聞かれたので、結羽は

「ああ、同じ会社に入る予定の人間だ。」

と答えた。

「あんな奴らと一緒に働いて、お前は大丈夫なのか？」

と聞かれると、結羽は答えられなくなってしまった。同じことを思っていたからである。しかし、T社に入社する以外の選択肢を持っていない結羽はどうしようもなく、あとは無事に大学を卒業し、無事に入社日を迎えるしかなかった。

二の（一） 入社と結婚式

二

二〇〇二年四月一日。全国各地の会社では入社式が行われていた。結羽もＴ社の入社式の中にいた。従業員三〇〇〇人の会社で、新入社員は三〇人とこぢんまりとした入社式であったが、一応社長の式辞があつて、その横には役員や部長と思われる五〇～六〇歳の男が三〇人ほど座っていた。

入社式が終わると、人事部の教育担当という三〇歳前半の男のもと、一ヶ月の新入社員研修を受けた。最初にマナー研修があり、電話の取り方や手紙の書き方、慶弔時の扱い、名刺交換の方法など、色々なことを学んだ。常識知らずの結羽にとっては新鮮な研修であったが、逆に社会人ともなると責任も背負わされるんだな、という想いの方が強くなり、少し沈んだ気持ちになっていた。それよりも依然気の合う仲間が見つけれずに、新入社員の間では一人浮いている存在のような気がして、それが嫌だった。

マナー研修の後、営業研修、メンテナンス研修、工場研修、研究所研修とすべての部署を一通り経験するプログラムが組まれていたが、結羽がびっくりしたのが、その研修の間に日記のようなものをつけさせられたことだった。その日記は、帰宅してから記入し、翌朝人事部の教育担当に提出すると、帰宅時までにはコメントが付いて返ってくるというものであったが、三〇歳前半の男と交換日記をしなければならぬと思うと、少し気持ち悪かった。小学校の時に日記の宿題が出たことがあつたが、日記はそれ以来で、何となく子供じみたことが好きな会社なんだな、と思つた。

新入社員研修の一ヶ月間が終わわり、ゴールデンウィーク明けに正式な配属先を言い渡された。相変わらず同期入社の人たちは目立ちたがり屋が多かったので、自分の営業部配属はないな、と結羽は思

っていたが、言い渡された部署は研究所であった。ここは他社製品をカスタマイズする方法を開発する部署で、二次面接のときにも、研究所研修のときもP社やM重工の最新機種を見せてもらったこともあって、ここなら面白そうだな、と思っていた部署だったので一安心だった。結羽の他に、小林という男と高卒で事務職の城之内あゆみという女が研究所配属であった。辞令交付が終わった後、以前結羽の研究室へ邪魔しに来た中野が、一ヶ月の研修の打ち上げをやるうと言って飲み会が行われることになった。目立ちたがり屋の多い同期の中でも、一番目立っているのが彼であった。研修では、同じ研究所配属の小林と城之内とはあまり接点がなかったので、飲み会の時に「よろしく」と言いながら二人と話してみた。小林は童顔で、外見だけだと高校生に間違えてしまいそうな風貌だったが、妙に明るく、関西出身ということで関西弁だけが耳に残った。城之内は高卒なので、結羽の六歳下であった。彼女は大学以上の人には遠慮をしているのか、飲み会の席では大人しく座っているだけであった。

研究所に配属され、こちらでも一週間ほど研修があり、研究所の下部組織である「課」の配属を言い渡された。城之内は元々事務職で採用されているので、当然「庶務課」というところに配属された。小林は「開発第三課」というところで、ここはP社の最新機種の評価およびカスタマイズ方法の開発を行っているところであった。そして、結羽は「材料研究課」というところであった。ここは、他社製品は扱っておらず、新しい材料を開発してメーカーに売ること、新しいビジネスを立ち上げよう、ということを目指にしていた。実際に職場へ行ってみると、大学と同じ実験台があり、ピーカーやフラスコなど、つい一ヶ月前まで使っていたものと同じものが目の前に置いてあった。どうやら、T社の中では最も基礎的な研究をする課のようであり、研究職は合っていないのかもしれないと思って就職した結羽は、この職場を複雑な想いで見つめていた。材料研究課の課長は魚谷という四〇歳の男で、その下に鳥飼という三〇歳の男

が働いていた。

研究所に配属されて初めての日曜日。結羽は同期の小林と一緒に電気街へ行った。小林がパソコンを買いたいと言ったので、彼についていいのだ。結羽はパソコンなどの家電が好きだったが、小林が自分もパソコンに詳しいと言うので、どんなものを買うのか、少し興味があった。実は、結羽は二ヶ月前にパソコンの部品を買ってきて、自分で組み立てたものを使っていた。当時、高性能パソコンを手に入れるにはこの方法が一番安かったし、何しろ組み立てる作業自体が楽しかったのだ。当然、小林もパソコンに詳しいというので自作するのだろうと思ってついていったのだが、彼は大手メーカーのパソコンの前で止まり、店員と何か話していた。いきなり関西弁で値切りの交渉をしていたのだ。話を聞いていると、大阪商人のような値切りテクニクは素晴らしいものがあつたが、パソコンには全然詳しくなかった。結局、見栄を張っていただけと言うことがわかった。どうも、この小林という男はハッタリの話が多かつたし、外見も童顔で子供っぽかつたが、やることも子供じみているところがあつた。おそらく本人は営業部希望だつたのだろう。しかし、人事部から見ると少しくさん臭く見えたのだと思う。結羽はどうも小林を信用する気になれず、次第に敬遠するようになっていった。

こんなこともあつた。小林が庶務課のある女性を食事に誘っているところを、結羽は偶然見てしまった。すると、小林は「お前も一緒に来るか？」と何故か誘ってきた。その誘いはあまり嬉しくなかつたが、仕方なくついていくことにした。しかし、何故その女性を誘つたのだらうと思った。その女性の左手の薬指には指輪が入っていたのだ。確かに綺麗な女性だつたが、いくら何でも人妻を誘うのはいただけない。食事の最中、彼女は携帯電話で誰かに電話していた。しばらくすると旦那さんが現れた。どうやら社内結婚らしい。小林はバツが悪そうな顔をしていたが、そんなことは左手の薬指を見た時点で一目瞭然であり、「バカな男だな」と結羽は思った。実

は、結羽も庶務課にいる山村優子という女性が最初気になった。結羽の作業着を注文する際に、夏服と冬服を間違えてしまうような少しドジな女性だったが、長身で美人の山村に少し惹かれていた。しかし、よく見ると右手の薬指に指輪が入っていたので、カレシの存在は容易にわかった。そして、半年もしないうちに右手が左手に代わり、さらに半年もすると結婚して会社を辞めていった。

仕事は、六歳年上の鳥飼と一緒にすることが多かった。伝票の書き方から備品の使い方まで丁寧に教えてくれた。新入社員研修のときに書いていた日記もなくなり、やっと社会人になった気がした。しかし、職場は相変わらず大学と同じような研究室で、材料の調査などをしていた。

ある日、鳥飼が「今晚空いていないか」と聞いてきた。結羽が理由を聞いてみると、週に一回社内でバドミントンをやるサークルがあつて、そこに来ないか、という誘いであつた。結羽は、中学時代にバドミントン部に所属していたので、社会人になったらバドミントンサークルに入ろうと思っていた。なので、本来であれば大歓迎の話なのだが、本当は社外のサークルが良かった。それは、結羽に彼女がいなかったからである。純粋にバドミントンをやりたい、と思っていたわけではなく、女性との出会いの場もあるのではないか、という下心もあつた。それが社内のサークルとなると社内恋愛になつてしまうので、何となくそれはいけないことのような気がした。しかし、鳥飼に誘われて断る理由も見つからなかったので、その晩は社内のバドミントンサークルに行くことにした。

鳥飼に連れて行かれて近くの体育館へ行くと、そこにはそれぞれ四人くらいの男女がいた。その中には、上司の魚谷課長もいて、材料研究課の三人全員がそこに揃つたことになる。また、同期の城之内がいた。彼女も庶務課の先輩社員に連れてこられたということで、庶務課の女性社員が城之内の他に二人いた。結羽は仕事とプライベートを完全に切り離したいと思つていたので、同じ職場の人とバドミントンをするのはどうも気が進まなかったが、やはり断る理由が

見つからなかったもので、しばらくの間は毎週そのサークルに参加することになった。

同期の城之内あゆみは、少し不思議な雰囲気を持った女性であった。外見はスレンダーで、美人と言うよりはかわいらしいといった感じ。二ヶ月前までは高校でミニスカートの制服にルーズソックスを履いていたということで、いかにも今どきの女の子という感じでもあった。いつもニコニコしていたが、口数はそれほど多くなく、そのあたりが不思議な雰囲気を醸し出していた。これが社外のサークルであれば、結羽も気になる女性の一人になったかもしれないが、六歳下ということもあったし、社内恋愛はそもそもいけないことだという先入観があったので、城之内にはあまり関心を持たなかった。仕事の方は、研究所配属から三ヶ月も経つと慣れてきて、少しずつ楽しくなってきた。研究職は向かないと思っていたが、元々実験するのは好きだった。ノーベル賞をもらうような人は偉大な発見をするのだろが、平凡な研究者でも実験をすればチリのような小さな発見くらいはできるのであった。結羽も大学時代に材料の調査割合を間違えて測定したら、新しい性質が発見されたということがあった。薄型テレビや電卓の表示画面で使われている液晶技術も、研究員が容器のフタを開けっ放しにして帰ってしまったのが実用化のきっかけだった。容器内に不純物が入ってしまったのが、逆に性能が上がるという現象につながったのだ。結羽の発見は、特に何かの実用化につながるようなものではなかったが、学術論文として発表することができ、指導教官にも褒めていただいた。それでも研究職に向かないと思ったのは、先述の通り大学に入ってから数学が苦手になってしまったからなのであるが、実験自体は好きだった。新入社員ということで、実用化が程遠いような材料ばかりあてがわれたが、そういうものは少しの発見で性能が飛躍的に向上することもあり、いつもワクワクしながら毎日を過ごしたのであった。

二の（二） 入社と結婚式

入社して数ヶ月も経つと、結婚する同期も現れた。学生時代から付き合っていて、社会人になったのを機に結婚するというのはよくある話だろう。宮本という男が結婚するということで、結婚式に呼ばれることになった。結羽は親戚も少なかったので、結婚式に出るのは初めてであった。同期のリーダー格であった中野は宮本から余興をやって欲しいと言われ、気合いが入っていた。余興は当時流行っていたダンスを踊ることになり、結羽や小林の他、同期の六人ほどが集められて、終業後に練習することになった。練習場所は、中野や小林が入っていた独身寮のロビーであったが、同期とは息の合わない結羽は二回に一回の割合でしかその練習に参加しなかった。同期と一緒にいても全然楽しくなかったからである。それでも、何とか踊りを覚えて当日を迎えた。

当日はマナー研修で習ったようにお祝儀を包んで、披露宴会場へ足を運んだ。指定された席に座ると、宮本の上司と思われる会社の人間が一つのテーブルを囲んでいた。何だか会社の嫌な縮図をそのまま見ているようで、嫌な気分になった。披露宴が始まると、宮本の上司が、それこそ「結婚式のスピーチ集」という本に載っているようなありきたりのスピーチをしたが、まるで朝礼の訓示を聞いているような感じだった。新婦の上司のスピーチもあったが、内容は似たり寄ったり。目の前に豪華な料理やお酒があるのに、延々とスピーチを聞かされるのは、苦痛以外の何物でもなかった。結局暇だったので、目の前に並んでいる料理とお祝儀に包んだ金額を比べて、どのくらい元が取れているんだろうなあ、なんてことを考えたりしていた。ようやく乾杯となり、ビールを口にすることができたが、すぐに余興の準備をしなければいけないということで、結羽たちは席を外した。余興も無事終わり、片付けをして席に戻ると、新郎新婦はお色直しで席にはいなかった。その間、司会の女性が一生懸命

祝電を読み上げていたが、誰も聞いていなかった。そもそも、新郎新婦がいないうちに読み上げられても意味がないのでは、と思いつながら、結羽は注がれたワインを口にしていた。しばらくすると、新郎新婦はキャンドルを持って入ってきた。各テーブルにあるローソクに火を灯すキャンドルサービスであるが、結羽は何のためにそんなことをするのかわからなかった。キャンドルサービスの間、司会の女は色々なことを喋っていた。よく聞いてみると、「新婦の。。さんは、今まさに幸せを感じています。日頃の感謝の想いを胸に、一つ一つキャンドルに火を灯しています。」というようなことを言っている。彼女は別のことを思っているかもしれないのに、この司会は何なんだろう、と思いつながら、そのわざとらしい司会の言葉で結羽はぼーっと聞いていた。これが、型にはめられた一般的な結婚式というものである。最後は、これまたお決まりのように新婦が涙しながら両親に向かって感謝の手紙を読んで、披露宴はフィナーレを迎えたのであった。

披露宴が終わった後、結羽は馬鹿馬鹿しい気分になっていた。こんな結婚式なら二度と出たくないし、自分はこんな結婚式を挙げたくないな、と思った。さらに数ヶ月後に信じられない結婚式に出席することになった。同期で高卒の女が結婚することになったのだが、宮本の結婚式の話聞いたらしく、同じ余興をして欲しいと中野にお願いしたのである。同じ余興であれば練習する必要もないので中野はOKしたそうだが、その女とは普段から仲が良かったわけでもなく、ただ同期入社という関係でしかなかった。行ってみると、結羽たち余興メンバーの座席がなかった。話を聞くと、余興だけやって欲しいとのことである。豪華な飯にも美味しい酒にもありつけず、ただ踊ってほしいというお願いに、メンバー一同啞然としてしまった。さすがに誰もが頭に來たみたいで、持ってきたご祝儀は誰一人出すことはなかった。余興が終わった後は、当然のように披露宴の会場から追い出され、帰りの道中では誰一人喋ることなく、帰路についたのであった。

しかし、結婚式で悪い思いばかりしたわけでもない。社会人になって五年くらい経ったときに、大学時代の親友だった村本が結婚した。結羽は友達が少なかったが、その少ない友達のことは大事に思っていた。なので、村本が結婚することになったら、ぜひお祝いしたいと思っていたのである。先の二件の結婚式は大きな会場で行われたが、村本の結婚式は郊外の小さな会場で行われた。ガラス張りの会場で、その天井や壁には水が流れる演出がなされていたが、当日はあいにくの土砂降りで、その演出が台無しになってしまった。しかし、それも村本の結婚式らしいな、と思って眺めていた。その結婚式には会社の上司と思われる人の姿はなく、親族と友人のみの非常にアットホームな式であった。当然、スピーチの類のイベントはなく、普段の飲み会を少し豪華にしたようなパーティーで、ごく居心地がよかった。同じNK大学の人とワインを飲みながら談笑していたところ、いきなり司会の女がマイクを持ってきて何か喋って下さいと言われたが、これも村本なりの粋な演出の一つだったのだろう。酔いが回っていたが、下手なことと喋れないと思い、言葉を選びながら村本のことを話したが、これはこれで楽しかった。聞いている本人も、会社の上司の型にはまったスピーチを聞いているより楽しかったと思う。T社にはないユーモラスな結婚式に出て、自分も式を挙げるならこういうのがいいな、と思いながら会場を後にした。

三の（一） 社内恋愛

三

Ｔ社に入社して四ヶ月が経ち、徐々に仕事に慣れてきた。同期には気の合う人はいなかったが、同じ課の魚谷課長や鳥飼とはうまくやっていた。研究の方は、依然として実用化が遠いようなことばかり取り組んでいたが、それでも少しずつ材料の性能が上がっており、当時はそれだけで結羽は満足していた。

相変わらず、週に一回のバドミントンサークルにも参加していた。別に社外のサークルに行きたくなったら掛け持ちすれば良いだけだったので、社内のサークルをすぐにやめる必要もなかった。

ある日、サークルが終わって帰ろうと最寄りの駅に行くと、人身事故で電車が止まっていた。「参ったなあ」と思ったが、同期の城之内も帰れないということで、一緒に駅の近くの喫茶店に入った。結羽と城之内は電車の方向が逆で、普段はサークルが終わるとまっすぐ家に向かうので、これまでは一緒に喫茶店に入ることはなかった。職場でもあまり話をしなかったのも、もしかすると城之内と面と向かって話すのは始めてだったかもしれない。話はサークルの話から始まって、職場のことなどたわいのない話をした。喫茶店に入ってから一時間くらい経ったであろうか。電車が動き出したとのアナウンスが聞こえたので、結羽は二人分のコーヒー代を出し、彼女と別れたのであった。

運転再開直後ということもあって、電車の中は非常に混んでいた。結羽はドア付近に立って、窓の外をぼんやり眺めていた。しかし、外の風景は目に入っておらず、城之内のことばかり考えていた。話としてはたわいのないことばかりであったが、実に楽しい一時間だった。彼女は他の人とはちよつと考え方が変わっていて、それを聞くのが楽しかった。また彼女と話してみたいと思った。

翌日、結羽は城之内に次の週末の予定を聞いてみた。土曜日なら

空いていると言う。

「お昼でも一緒にどう？」

と誘うと、彼女は

「じゃあ、ご馳走になります。」

と笑顔で言った。結羽はその週末をとて楽しみにした。毎晩の眠りが何となく浅くなったような気がした。

遂に待ちに待った土曜日がやってきた。結羽は約束した時間の十分前に待ち合わせ場所に行った。彼女は時間ぎりぎりにやってきた。

「ごめんなさい。待ちましたか？」

「いや、今着いたところだからちょうど良かったよ。」

と会話を交わし、レストランに入った。お互い、パスタを注文し、食べながら色々な話をした。

お互い話し足りなかったのか、喫茶店に場所を移し、さらに一時間ほど色々な話をした。結羽は最後にどうしても聞きたいことがあった。彼女が「そろそろ帰ろうかな」と言ったとき、結羽は勇気を振り絞って聞いてみた。

「今、付き合っている人はいるの？」

彼女は少し黙った後、こう答えた。

「最近まで高校時代から付き合っている人がいたけど、今はいいですよ。」

それを聞いて、結羽は心の中でガツポーズしていた。また、彼女が「何故そんなことを聞くんですか」と尋ねなかったことが心地良かった。

楽しかった約二時間が終わり、帰りの電車の中では先日と同じように城之内のことばかり考えていた。自分が恋に落ちてしまったのは分かっていて。しかし、彼女とは同じ職場の同期である。果たして社内恋愛をしても良いのだろうか、という想いがあった。それに、彼女が結羽のことをどう思っているのかもよくわからなかった。一度目の喫茶店は、人身事故がなければ一緒に行っていなかったわけで、そういう意味では今日が初めて彼女を誘ったことになる。その

誘いに彼女は応じた。しかも、彼女には特定の恋人がいない。しかし、それだけでは彼女が結羽のことを気に入ったということにはならない。付き合えるかどうかは別にして、とりあえず仲良くなることが先だと思い、これからも彼女を誘ってみることにした。

職場でも彼女と話す機会が増えた。会話自体は何でもないことばかりであったが、少しずつ距離が縮まっていくのが嬉しかった。次の誘いは三週間後にした。間を空けたのは、その時点ではただの同期同士の関係でしかなかったし、あまりしつこくされたら嫌だろ
うな、と思ったからである。幸い、三週間後も空いているという返事がもらえたので、その日は繁華街と一緒に歩くことにした。

別に買いたいものはなかったが、雑貨屋へ行くと彼女は子供のようにはしゃいだ。まだ一九歳と結羽よりも六歳若かったので子供っぽく感じたのも当たり前だが、結羽にはそれがかわいらしく見えた。彼女も久しぶりに男の人と街を歩くというのもあって、それを楽しんでいるような感じだった。お互いが心地良い気分でした百貨店のエスカレーターに乗ったときであった。急に

「お前ら、何しとるねん！」

と下の方から男の声が聞こえた。階下を見ると、同期の小林がいた。明らかに彼の声であった。しかし、エスカレーターに乗っていたので、結羽と城之内はそのまま上の階に上がってしまった。その後、小林の姿は見なかった。

結羽と城之内は気まずい雰囲気になってしまった。小林は同じ職場の同期である。同じ職場に同期は三人しかおらず、そのうちの二人が一緒にいたとなると、面白いはずがなかった。子供っぽい彼がどんな行動に出るのかは全く予期できなかったが、とにかくただでは済まないような気がしてならなかった。

次の週に会社へ行くと、同期の連中はみんな百貨店での出来事を知っていた。目撃者は小林しかいないので、彼が喋ったのである。しかし、研究所内で知っている人はいなかった。それなら普段の仕事には差し支えないな、とホッとした気持ちになったが、城之

内とは気まずい雰囲気のままであつた。何しろまだ付き合つていなかったし、結羽も想いを伝えたわけでもなかった。Ｌ百貨店での出来事がなければ、そのうち付き合い始めたかもしれないが、小林のせいで気真津胃雰囲気になつてしまったのが妙に腹立たしかった。しかし、どうしようもなかった。

結局、二ヶ月ほど何もできず、時間だけが過ぎていった。しかし、例のバドミントンサークルでは一緒だったので、週に一回会うことはできた。ただ、会話はめっきり少なくなつてしまった。このままでは何の進展もないと思い、結羽は思い切つて彼女をドライブに誘つてみた。彼女を安心させるため、今度は誰もいないようなところへ行こうと言つたのだ。彼女はしばらく考えていたが、OKと言つてくれた。すでに紅葉のシーズンになつていたので、結羽と城之内は日帰りできる範囲でできるだけ遠くの名所まで遊びに行った。最初は気まずい雰囲気だったが、彼女の携帯電話に一通のメールが届いた。そこには

「今度、一緒に紅葉でも見に行きませんか？ 小林」

と書いてあつた。これを見て、二人で思わず笑つてしまった。Ｌ百貨店で結羽と城之内が一緒にいた現場を目撃した張本人である。その男がどういう気持ちでこのメールを送信したんだろうという話題で盛り上がった。しかも、二人が一緒にいるときにこのメールが来たというのも面白かつた。このメールをきっかけに、これまでの気まずい雰囲気が一気に解消したような気がした。小林は城之内のことが好きだつたのだろうか。それとも結羽とのライバル心から送つてしまつたのだろうか。いずれにせよ、笑っている彼女の表情からは、小林のことは眼中にないという感じで、それが結羽にとって嬉しく思えた。そこで、結羽は城之内に聞いてみた。

「僕たちって、今どんな関係なんだろうね？」

彼女は笑つて答えた。

「そうね。友達以上恋人未満って感じかな。」

それは結羽も同じ想いだつた。確かに城之内のことは好きだったが、

恋人になったという感じではなかった。でも、ただの女友達という関係でもないと思った。

「Ｌ百貨店の件もあるし、しばらくはこんな宙ぶらりんな関係で良いんじゃない？」

と彼女は言った。結羽は何も言わず、首を縦に振った。

その後も結羽と城之内は隔週で会っていた。もうＬ百貨店の出来事も気にならなかったし、その後小林からのメールもないとのことだった。そしてクリスマスのシーズンがやってきた。結羽はクリスマスを特定の恋人と過ごすのは初めてだった。学生時代はどうも恋愛が長続きせず、夏に出会ったカノジョも冬になると別れを告げられるという恋愛を繰り返し返していた。しかし、城之内とはまだ友達以上恋人未満の関係だった。そこで、クリスマスイブの二四日はやめて、一日前の二三日に会うことにした。この日も結羽は車を出して遠くまで行った。Ｌ百貨店のことが気にならなくなったとは言え、色々なところで噂をされるのはうつとうしいと言えはうつとうしかった。帰りの道中でオシャレなレストランを見つけたので入ってみると、そこはクリスマスのコース料理しか出せないと言われた。しかし、結羽は城之内と良い雰囲気になりたかったので、「それをお願いします」と言って店内に入った。二三日ということもあってか、予約なしでコース料理を楽しむことができた。城之内は

「こんな大人っぽいクリスマスは初めて。」

と、とても喜んでいた。車を運転していたのでワインは飲めなかったが、結羽は城之内に酔っていた。

レストランを出た後、彼女を家の近くまで送っていった。彼女は「ありがとう」と言って車を降りようとするときに、結羽は顔を彼女に近づけた。彼女は目を閉じ、唇を重ねた。彼女と初めてしたキスだった。唇を離すと、彼女は「おやすみ」と言って、家の方へ歩いていった。結羽は、やっと恋人同士になれたんだ、と実感していた。

次は、会社が年末年始休みの初日と最終日に会う約束をした。年

末の仕事納めの日、T社の研究所でも律儀に納会が行われた。そこには結羽も城之内もいたが、小林もいたので二人は離れたところにいて他の社員と話をした。そのこと自体は何もおかしいことではなかったが、結羽は城之内の視線が何となく冷たいような気がしてならなかった。

次の日、結羽と城之内は約束通り会った。しかし、彼女は明らかに怒っていた。会うといきなり

「何故あの日キスなんかしたの？」

と問い詰めてきた。結羽は何も答えられなかった。

「カレシでもない人とキスしたくないの！」

と強い口調で言うので、結羽も頭にきてしまった。

「それなら、好きなようにすればいい。」

と突き放すような言い方をすると、彼女は何も言わずにどこかへ行ってしまった。それを結羽も追いかけなかった。

城之内とは初めてした喧嘩だった。しかし、結羽は他の女に浮気をしたわけでもなかったたので、謝る理由もなかったし、どうしたら良いのかわからなかった。年末年始休みの最終日も会う約束をしていた。とりあえず、約束の待ち合わせ場所に行ってみよう、と思いながら年を越した。

三の（二） 社内恋愛

元旦の朝、届いている年賀状に目をやった。大学時代の恩師や友達からの年賀状をパラパラとめくっているうちに、一枚の年賀状のところで手が止まった。

「もつともつと仲良くなれるといいね。」

と書いてあった。差出人を見ると、城之内からの年賀状であった。元旦に届いたということは、喧嘩する前に投函したのだろう。この年賀状を書いたときは、自分のことをどう思っていたのだろう、と結羽は考えた。と同時に、今どう思っているのだろう、ということが気になり出した。そう考えると、すぐにでも会いたい気持ちになった。しかし、年始にいきなり会いたいと言っても迷惑な話だろう。結局、年末年始休みの最終日の会う約束に賭けてみるしかなかった。休みの最終日、結羽は約束してあった待ち合わせ場所に行ってみた。来なかったらそれはそれで仕方がないと覚悟していた。約束の時間から五分くらい経った頃、彼女が現れた。何と声を掛ければいいのかわからなかったが、とりあえず

「明けましておめでとう。」

と言ってみた。すると、彼女は笑顔になって、

「おめでとう。」

と返してくれた。しかし、会話はそこで止まってしまった。会う約束しかしていなかったもので、どこに行くのか決めていなかったのだ。そういえば、結羽は初詣に行っていなかったことを思い出し、

「初詣でも行かない？」

と言うと、彼女は

「二回目だけど、まあいいかあ。」

と言って結羽の車に乗り込んだ。結羽は

「一回目は誰と行ったんだ？」

と少し意地悪な効き方をすると、城之内は

「家族とに決まってるじゃん。」

と笑顔で答えた。それからは喧嘩のことは忘れて、いつもと同じように色々な話をしながら、少し遠くにある神社へ向かった。

その神社に向かっている道中で、結羽は

「今日は何故来てくれたの？」

と核心の質問を試してみた。彼女は

「前から約束してたよね。」

と言った後、続けて

「実は、結羽さんからの年賀状を見て、会いたくなっちゃったんだよね。」

と言った。結羽も城之内の年賀状を見たのと同じように、彼女も彼の年賀状を見たのだった。

「正式にお付き合いをお願いしても良いですか？」

と聞く城之内に対して、結羽は何も言わず首を縦に振った。本当はすぐにでもキスしたかったが、運転中だったので我慢した。神社に着くと、二人は初めて手をつないで歩いた。何だか新鮮だった。神社では自然に

「この人とずうっと一緒にいられますように。」

とお願いしていた。彼女に

「何をお願いしたの？」

と聞くと、城之内は意地悪な顔をして

「内緒っ。」

と言った。それを聞いて、急に彼女との距離が近くなったのを感じた。帰り際、クリスマスするときと同じようにキスをして別れたが、彼女は

「もう怒ったりしないから。」

とにつこり笑いながら言つて、家に帰っていった。

付き合い始めてから二ヶ月ほど経ったころ、城之内は交通事故を起こしてしまった。しかもよりによって会社の正門の前で、城之内が右折しようとしたところ、直進車と衝突してしまったとのことだ。

あった。幸い、どちらも軽傷で済んだが、過失があるのは明らかに城之内であった。心配になった結羽は、できるだけ彼女の傍にいてあげるようにした。彼女は明らかに動揺していたが、結羽が横にいたことで少しずつ落ち着きを取り戻しているようであった。警察の実況検分が始まる頃には結羽は職場に戻らなければならなかったのだ。最後まで一緒にいてあげることができなかったが、何とか元気づけたいと思っていた。その日は三月一日でホワイトデーだった。その一ヶ月前のバレンタインデーの日に、結羽は城之内からプレゼントをもらっていたので、そのお返しを渡そうと思っていたのである。しかし、城之内はそのまま警察へ行ってしまったので、プレゼントのお返しは結羽の手元にあった。それならば、アポなしでこれを家に届けてあげようと思いついたのである。結羽と城之内の家は電車の方向が逆であったが、結羽はいつもとは反対方向の電車に乗り、彼女の家の近くまで行った。そして、携帯電話で彼女を呼び出した。彼女は、さすがに警察で事情聴取を受けた後とあって、疲れた顔をしていた。しかし、結羽の顔を見ると、涙を流しながら彼のもとに駆け寄り、彼の腕の中に入った。結羽はプレゼントを渡し、彼女が泣き止むまで抱きしめていた。彼女は泣き止むと「もう大丈夫だから」と言って、家に帰っていった。

次の日から、彼女は元気に出社してきて、結羽を安心させた。気丈に振る舞っている姿は痛々しかったが、彼女もそうするしかなかった。それでもいずれ時間が解決してくれるはずだった。しかし、これとは別に困ったことになっていた。交通事故の時に結羽が城之内に寄り添っていた姿を見て、職場でも社内恋愛がバレってしまったのだ。ある課長は、その日の出来事を奥さんに話したところ、

「あなたは鈍感ね。」

と言われて、結羽と城之内の关系到気づいたそうである。いずれにせよ、社内恋愛が公知になってしまった。そうになると、どちらかの人事異動の話が出てくるのは時間の問題であった。

結局、交通事故から三ヶ月後に、城之内は本社の秘書課へ異動に

なった。とは言え、結羽にとってもこの人事異動はありがたかった。職場で変な目で見られながら仕事をするよりも、離れたところでお互い働いていた方がやりやすいと思ったからである。彼女も同じように考えていたようで、秘書課への仕事を前向きにとらえていた。結羽は彼女に対して申し訳ない気持ちと、秘書課での活躍を応援する気持ちの両方を持ちながら、彼女の異動を見送ったのであった。

四の（一） 人事異動

四

Ｔ社に入社して一年が経った。結羽にとっては何もかもが初体験で、あつという間の一年だったようにも思えたが、大学にいたのは随分前のような気もして、不思議な感じだった。仕事は相変わらず実用化に程遠い研究ばかり担当していたが、それでも少しずつ成果が出始めていて、実験するのが楽しかった。ある材料は電池として動くことを初めて実証した。一ミリアンペアの電流しか取り出せず、実用的には何の意味もなかったが、その材料で電流を取り出したのはおそらく世界で初めてのことであったので、その成果を論文にまとめ、学術雑誌で発表することができた。博士号を持っていた魚谷課長や鳥飼は、結羽の論文発表を喜んでくれたし、結羽もＴ社の技術力ＰＲに一役買うことができたと思っていた。しかし、会社は何の評価もしてくれなかった。それどころか、他の研究課から新しい成果が出て論文発表したり、実用化に成功したという話を一切聞かなかった。結羽は、成果が出ていない他の研究員はいつも何をやっているのだろう、と不思議に思っていた。確かに、基礎研究で最初から成果が出るとわかつているものはない。実験や計算をしてみても実用化の見込みの有無がわかり、実用化に近づくためには他の材料や方法を試すなどの試行錯誤を苦勞しながら何度も繰り返すことが重要なのである。場合によっては、実用化の見込みがないと分かった時点で研究を断念することもあるだろう。しかし、Ｔ社の研究員の多くは、実用化に向けて必死に試行錯誤を繰り返すわけでもなければ、実用化が難しいテーマをやめて、より可能性のある新しいテーマを立ち上げよう、ということもなかった。逆に、実用化が無理だとわかっていても、組織や予算を守るために延命されているテーマも数多くあった。結羽は、そのことに少しずつ不満を持ち始めていた。

結局、結羽は二年間の研究で論文を五報発表することができた。大学との共同研究もあって、先生に発表していただいた論文も他に四報あった。論文を発表しても会社から評価されないことはわかっていたが、すぐに実用化できるわけではなかった。途中で成果をPRするためにはこうするしかなかった。さらに、国際会議で二件発表する予定だったが、運が悪いことに現地でテロが発生し、海外出張が中止となってしまった。ただ、入社二年目で海外出張なんて恐れ多いと思っていたので、残念な気持ちとホッとした気持ちの両方が交錯していた。

入社三年目に突入し、結羽はゴールデンウィーク前に三連休を取った。城之内あゆみとは順調に交際していたが、別に彼女と旅行に行ったりするためではなかった。人事課が作った教育プログラムに「入社三年以内に。の資格を取得すること」と明記されていたので、その資格を取るために二泊三日の講習会に参加したのだった。三〇〇〇人という規模の会社の割に、「人事処遇制度」とか、「昇格試験」とか、人事関連の制度が大企業並みに充実していた。人事研修も毎年のようにあり、結羽はそれに参加するのがすごく嫌だった。ただ、今回は社外の講習会だったので、気楽な気持ちで参加していた。

講習会から帰ってくると、結羽は社内の雰囲気が変わっているのを感じた。何となく自分に接する人たちの様子がよそよそしい。気持ち悪いな、と思っていると、魚谷課長に呼ばれ、一枚の紙切れを渡された。そこには、

「企画第三課への異動を命じる」

と記されていた。結羽は一瞬目を疑った。しかし、辞令であることは間違いなかった。結羽は仕事を一生懸命やっていた。やっと研究の面白さもわかってきて、充実した毎日を送っていた。最初は自分には合っていないと思っていた研究も、最近「これも研究職で骨を埋めよという神のお告げなのかな」と思い、研究を極めるつもりでいた。それが何故……。T社の企画第三課は、研究関連の企画業

務を担当する部署ということで研究所にあったため、異動と言っても机を数メートル移動しただけだった。しかし、たった数メートルでもその間には大きな壁が立ちはだかつているように感じられた。

結羽の仕事は、新入社員の女性に引き継ぐことになった。ただ、新入社員に引き継いでも理解できないだろうということ、実質的には魚谷課長と鳥飼に仕事を引き継いだ。その中には結羽は一から始めた研究もあり、愛着もあつた。それが、あの紙切れ一枚で全てを手放さなければならぬと思うと、悔しくてたまらなかつた。しかし、それがサラリーマンの宿命なので、仕方がなかつた。

しかし、入社三年目の人間が企画課に行つて、何の役に立つのだろうか。本来であれば、入社十年以上が経過した係長以上で構成されるケースが多い。それは、企画・立案の仕事はそれなりの経験がないとできないからだ。これは後で聞いた話なのだが、企画第三課も最初は研究所にいる係長の中から人選していたらしい。しかし、候補に挙がつた人の課長からことごとく断られ、入社三年目以下の若手であればOKという返事しか得られなかつた。それならばということで、企画第三課の課長と同じ高校の出身である結羽に白羽の矢が立つたとのことであつた。出身高校が一緒という理由だけで異動させられたと知つたときには、怒りで気が狂いそうになつた。また、このTK高校に結羽は良い思い出がなかつた。結羽は中学校までN市に住んでいたが、両親がマイホームを購入する際に郊外のT市に引越した。そして、近所のTK高校に通うことになったのだが、TK高校では全く友達ができなかつた。N市にいるときは明るくてリーダーシップも発揮できる子だったが、どうもT市の人とはソリが合わず、高校でも大人しくしていた。大学はN市にあるNK大学に通うようになったので、結羽は本来の明るさを取り戻したが、T市のことはいつまで経つても好きになれなかつた。そのTK高校つながりで今回の異動辞令が出たということを知つて、余計に気分が沈んでしまつたのであつた。

四の（二） 人事異動

ゴールデンウィーク明けから、数メートル離れた企画第三課で仕事をするようになった。最初は何をすればよいのか分からなかったが、とりあえず藤原課長から渡された資料を読んでみることにした。それは「平成〇〇年度開発方針」と書かれた資料だった。考えてみれば、同じ研究所にいたのに、隣の企画第三課が普段どんな仕事をしているのか、全く知らなかった。年に一回、所定のフォーマットに従って次年度の研究計画を出すように言われるのだが、接点はそれくらいであった。したがって、結羽が材料研究課でやっていた研究も含めて、Ｔ社の研究開発テーマをどこで誰が決めているのか、よく知らなかった。企画課といえば、普通の会社で言えば花形の職場で、企画課が作った方針や計画によって会社を動かすことができるという点では、やりがいのある仕事であるはずだった。結羽は前の仕事に未練が残っていたが、企画の仕事もそれはそれで楽しいかもしれないな、と思うようになっていた。

七月になると急に忙しくなってきた。Ｔ社の株主総会は六月末にあつて、そこで役員の交代があるのだが、企画第三課では新体制になつてから半年間で次年度の研究開発計画を立てなければいけなかった。残業時間は増えたが、仕事内容としては予算の集計など事務職の女性がやるようなことばかりやらされて、つまらない毎日を過ごしていた。残業が増えたことで、社内のバドミントンサークルにも行けなくなつてしまった。交際相手の城之内あゆみも秘書課に異動してから研究所とは疎遠になつてしまったため、いつの間にかサークルには顔を出さなくなっていた。それでも、週末になると結羽とあゆみはどこかへ遊びに行ったりしており、それが結羽にとって唯一の楽しみだった。しかし、あゆみも二一歳になつたばかりで、まだ結婚という話は出てこなかった。

企画第三課は藤原課長と吉村、結羽の三人しかいなかった。この

うち、吉村は五〇歳を過ぎており、普通の会社だったらリストラになっっているのでは、と思わせるような男であつたが、彼は丁社の特許を管理する仕事を与えられ、特許の書類を整理整頓するだけの誰でもできるようなことをやっていた。したがって、本当の意味で企画・計画の仕事をしていたのは、藤原課長と結羽の二人だけだつた。従業員三〇〇人のうち、開発に携わっているのは研究所を中心に三〇〇人ほどであつたが、それに対して企画スタッフが二人だけというのはどう考えてもアンバランスだつた。七月中に次年度の研究開発方針を作つて、八月に各課へ研究開発テーマの検討を依頼するのだが、二人で作つた方針というのも大したことがなく、各課はそれを無視して自分たちのやりたいテーマを挙げてくるのであつた。

一応、拳がつてきたテーマは企画第三課で査定して、会社の利益につながらないものなどについては再考を促すのだが、各課は「企画スタッフは現場を知らないからそういう査定になるんだ」と言つて、企画第三課の言うことを聞かなかつた。結局、各課の希望通りのものを次年度計画として社長に説明する、というのが企画第三課の仕事であつた。一二月頃になると社長の了承が得られ、仕事のヤマ場を越えることになるのだが、これでは各課の言いなりになつているだけで、とても会社を動かす企画課という感じではなかつた。現場で研究開発もできなければ、企画・計画もロクに作れない企画第三課の仕事は、決してやりがいがあるものとは言えなかつた。

しかし、藤原課長という人は不思議な人だつた。そんな仕事でもやる気満々で毎日を通り過ぎていたのだ。とても気配りができる人であるが嫌がるような調整役も自分から引き受けるようなところがあつた。そして、地道なことの積み重ねから丁社の駄目なところを変えていくんだといつも結羽に言つていた。そんな課長に最初は結羽もついて行こうと思つていた。ところが、実際は上層部にゴマをすることだけが上手い、ということがだんだんわかつてきた。ある日、結羽の作つた資料で、今後の計画をどのようにしていくのかを検討する会議があつた。結羽が作つたと言つても、当然藤原課長と綿密

に打ち合わせをしながら作った資料である。結羽は一通り資料の説明をした後、研究所長、企画部長、研究部長、開発部長の意見を伺うことになっていた。その時の資料は、所長や部長の考え方とは合っていないくて、会議では厳しい意見が飛び交った。当然、責任は企画第三課長にあるわけだが、藤原課長は信じられない言葉を発した。「所長や部長のおっしゃる通りですよ。結羽君は何故こんなことを書いたのかな？」

正直、信じられなかった。ハシゴを外されたというのはこういうことを言うんだな、と思った。実は、結羽の考え方は所長や部長に近かったのに、藤原課長がこだわって内容を変えた部分を指摘されたのだった。それなのに、課長にハシゴを外され、かと言って「これは課長に書けと言われました」と言うわけにもいかず、結羽が課長の意見を代弁して罪を被る役割を演じなければいけなかった。それでも、会議が終わった後に課長からフォローがあれば少しは気が晴れるのだが、そういうことは一切なかった。最初は結羽も驚いたが、次第にこんなことは日常茶飯事となってしまう、結羽は少しずつストレスを溜めていった。

企画第三課で仕事をしていると、だんだんT社の性格がわかってきた。それは、従業員三〇〇〇人の会社の割に組織が大きく、縦割り意識というか縄張り意識というものが非常に強いということであった。あるメーカーから商談があり、開発第一課に相談しに行くと、「それは開発第二課の仕事ではないか」と取り合ってくれない。第二課に持つて行くと、「何故その仕事をやらなくてはいけないのか」と言い始める。第一課と第二課が話し合って、会社にとってプラスになる方法を考えるという発想がないのだ。一方、他の部署から依頼を受けた仕事で成果が出ると、「これはうちの課で出した成果だ」とあからさまにPRし過ぎて、依頼元の印象を悪くする。まるで、「これは経済産業省のプロジェクトの成果だ」とか「これは国土交通省の管轄ではない」とか言っている国の役人と同じではないか、と結羽は思うようになっていた。

「Ｔ社の予算を見ても「官僚的だな」と思うことがあった。Ｔ社は三月決算であったが、年明けの一月頃から予算を使い切ることを強要されることが多かった。普通の会社であれば、経費を削減すれば、それだけ利益が増えることになるので、経費はなるべく使わない方がいいのだが、Ｔ社にはそんな発想がなかった。それは、予算を使い切らないと、次年度の予算が削減されてしまうからだ。三月までに予算を使い切って、次年度は同額またはそれ以上の予算を取ってきた課長が高い評価を受けるらしい。しかも、実際は実用化が無理だとわかっていている研究開発でも、何とか誤魔化して予算を取ってきてしまう課長もいて、結羽は何とも言えない気持ちでそれを見ていた。

それでも、現場の各課に好き放題やられていては、企画第三課の立場もなかった。全部は変えられなくても、会社にとって大事な研究開発だけでも少しずつ変えていければ、と思い、結羽は各課の課長に色々なお願いをしたり、相談をしたりした。しかし、お願いしに行くと、

「企画第三課の課長を通して話を持ってきてくれ」

と言われ、その通りすると、

「何故そんなことをしなければいけないのか」

と文句を言われた。お願いは上司経由でしかできないのに、文句は同じルートをとらずに平社員の結羽に直接言ってくる。権力は課長にあるが、責任は部下にあると言わなければならないの対応だった。どうやら、Ｔ社では権力を手にすると性格が悪くなってしまう人が多いようだった。結羽も係長から課長に昇格して決裁権を持つようになると、性格が別人のように変わってしまった人を何人も見ていた。自分はそうなつてはいけないな、と思いながら、そうなるくらいなら課長になれなくてもいいな、とも思っていた。部長ともなると、これに人事権まで掌握でき、まるで部下を将棋の駒のように扱う人が多かった。結羽の人事異動の件でも、研究者としての人材育成を考えれば、入社二年での企画課異動というのはあり得ないと思うの

だが、将棋の「歩」くらいにしか思われていなかったのだろう。

結羽はこのまま企画第三課で仕事をしているだけでは、自分が駄目になるような気がした。これでは毎日のモチベーションが上がりないからだ。何か新しいことを始めなければ、と思っていたときに、ちょうど材料研究課にいた頃に投稿した最後の論文が、ようやく学術雑誌に掲載されることになった。

「これを使わない手はない。」

と思った結羽は、早速前の上司である魚谷課長のところへ相談に行った。発表した五報の論文に関連して、将来また研究課に戻って仕事ができるように、大学へ勉強しに行けないかという相談をしたのだ。魚谷課長は、K大学の池江教授を紹介してくれた。しかも、これだけ論文があれば、博士号も取れるのではないかという話だった。結羽は自分が博士になれるほど頭が良いとは思わなかったが、何でもいいから目標が欲しいと思っていたので、博士号取得を目標にすることとした。後日、結羽は魚谷課長と一緒に池江教授のところを訪れ、学術指導のお願いをした。池江教授は

「結羽さんはまだ若いので、しっかり指導させていただきますよ。」

と言って、快く承諾してくれた。結羽は二ヶ月に一回K大学へ通い、博士論文執筆に向けた学術指導を受けることになった。

五 技術調査

五

結羽が企画第三課へ異動して二年が経過した。相変わらず上司にゴマをする課長や官僚的な組織にはうんざりしていたが、仕事自体は慣れてきて少しずつ余裕が出てきた。この頃になると、社内よりも社外の仕事の方が楽しく感じるが多かった。例えば、社外の仕事には、大手二社と共同で海外や国内メーカーを訪問し、最新機種や技術を調査するというものがあって、T社では企画第三課が担当することになっていた。報告書の作成などの面倒な仕事は大手二社の人がやってくれたので、結羽はただついて行くだけで良かった。しかも、メーカーの最新機種や技術を見せてくれるということで、普段事務的な仕事が多かった結羽にとって、技術に触れ合う唯一の機会だった。この仕事は調査に行ったからと言って、商談をしななければいけないわけでもなければ、目新しい商品や技術を見つけられなくてもお咎めがなく、まるで役人の「視察旅行」のようだった。とにかく、予算を使って調査をしたという事実さえあれば良かったのだ。大手二社の担当者は気さくな人で、せっかく行くのであれば夜も楽しめる場所にしましょう、と札幌のすすきのや福岡の中洲にも連れて行ってくれた。もちろん仕事の方も、M重工の造船所へ行ったり、DK工業の鋁山に入れてもらったり、P社の製造ラインを見せてもらったり、と日本の最先端技術を間近で見ることができ、結羽には勉強になることが多かった。この官僚的なイベントに参加することに對して少し後ろめたい気にもなったが、大手二社の担当者にはT社の社員よりも気を遣う必要がなく、それが何よりも嬉しかった。社内の人よりも社外の人の方が気楽だというのも変な話だが、そう思えば思うほど、自分はT社が合っていないかもしれないな、という想いが強くなっていった。

企画第三課在籍中に、海外調査にも二回行くことができた。一回目はオランダで最新技術の展示会があるということで、一週間アムステルダムに滞在した。しかし、展示会の調査は一日あれば終わってしまうので、ある日は海外メーカー主催のレセプションをハシゴしたり、他の日は真面目にドイツやオランダの研究所を訪問したりと、有意義な一週間を過ごすことができた。実は、結羽はそれまで外国にあまり興味がなく、この出張が初めての海外であったが、ケルン大聖堂やアムステルダムの街並みを見て、すっかり外国の風景に魅了されてしまったのであった。

二回目は国の役人の視察に同行するというもので、真面目かつハードなスケジュールだった。まず、イギリス・ロンドンへ行き、I大学へ行つて最新技術の調査。次はデンマークのコペンハーゲンにあるR社へ行つて最新機種を紹介してもらった。その後、オランダ・アムステルダムとドイツ・ケルンへ行つて、前回も結羽が訪問した研究所でヒアリング。そして、ドイツ・ドレスデンのS社で最新機種の製造ラインを見せてもらい、スイスのローザンヌ、ルツェルンへ移動して展示会を見学。最後は、スペインのアルメリアという小さな町にある鉱山へ行き、新しい材料を見せてもらった。結羽は上下に揺れる飛行機がどうも苦手だったが、この出張では二週間で何と一四回も乗ることとなった。

この旅行、もとい仕事は、国の役人の視察ということで、いろいろとおかしなことがあった。一つは、この役人が几帳面でせっかちだったということである。まず、事前に決めたスケジュール通りに事が進まないと気が済まないタイプで、空港で飛行機が遅れたりしようものなら、すごくイライラしているのが結羽たちにも伝わってきたのだ。また、以前に痛い目に遭ったのか、空港には二時間前に着いていないと不安で仕方がないと言うので、EU圏内の国内線扱いの路線でも二時間前に空港へ行くために早起きしなければいけないのが辛かった。当然、空港に着いてからの二時間はやることになったのだが、国の役人に文句を言うわけにもいかず、役人以外の

人はばーっと待っているしかなかった。

もう一つの問題は、役人の部下が頼りなかったことだった。その部下は、ホテルの手配を全て旅行代理店に任せたそうなのだが、そのホテルはすべて郊外にあって、交通の便が悪いところばかりだった。ロンドンのホテルは、中心地から十キロメートルほど離れた住宅街だったし、オランダに至っては、あのアムステルダム の街並みを見ることができないほど遠い場所だったのだ。どうやら、観光バスで周遊する日本人観光客のためのホテルを手配したようだったが、バスも何もない結羽たち一行はどうすることもできず、ホテルのバーでお酒を飲んで過ごすしかやることがなかった。幸い、サッカーの欧州選手権が開催されていて、現地の人とバーのテレビを見ながら一緒に盛り上がったことだけが救いだった。訪問先の地図が間違っていたり、チャーターしたハイヤーが来なかったりと、その役人の部下のおかげで多くのトラブルが発生し、その都度結羽たち一行をハラハラとさせるのであった。

結羽が国の役人に会うのはこの時が初めてだったが、丁社の社員とは違う意味で常識外れだった。まず、今回の海外調査の予算は、結羽たちの分を含めて全て国から出ていた。この調査を必ずしなければいけなかったのか、と言われればそうとは言い切れず、結局その役人が所属する課の予算を使い切るために行われた調査であった。結羽は、貴重な経験をさせてもらったことは別にして、このような予算の無駄遣いはやめて、余ったお金は国の借金返済に充てるべきだと思っていたので、少し後ろめたい気持ちになった。それでも、最低限の予算で調査が行われたのであれば、まだ罪も浅いであろう。しかし、信じられないことに、国の役人だけ飛行機はビジネスクラスに登場していたのである。しかも、役人と言っても次官クラスとかそんな偉い人ではなく、三〇代後半のまだ若い役人である。そんな人が、EU圏内でもわざわざ結羽たちとは別のスーパースーツに座っていた。一方、同じ予算なのに結羽たちはエコノミークラスだった。また、宿泊したホテルは、四ツ星以上のホテルばかりで、さ

すがに役人とそれ以外の人で部屋のグレードが違うということはなく、結羽も立派な部屋に泊まることができた。しかし、国の役人はスイスの展示会を見学せずに途中で帰国したのだが、スイスのホテルに到着すると、三ツ星以下にグレードダウンされていて、バスタブなし、シャワーのみの部屋になっていた。ここまであからさまにやられると、怒りを通り越してただ笑うしかなかった。

それでも「せっかく海外に来たのだから」と思い、結羽は毎朝早起きしてホテル周辺を散歩した。ドイツのドレスデンは観光名所に近かったので、デジタルカメラを持って行ってみた。すると、役人やその部下ではない同行者とばったり会った。おそらく、その人も結羽と同じ想いだっただろう。ドレスデンと言えば第二次世界大戦の時の大空襲が有名で、「ドイツの京都」と言われた街並みが破壊されてしまったのだが、東西ドイツ統一後から本格的な復元が始まり、結羽たちが訪れたときには綺麗な街に戻っていた。朝日がまぶしい中、結羽とその同行者は、役人に対する嫌な想いもしばし忘れて、美しい街並みにカメラを向けたのであった。

国の役人が帰国してからは、ホテルのグレードは下がったものの、それまで厳格だったスケジュールが緩くなったので、展示会を抜け出して観光することも可能になった。みんなフラストレーションが溜まっていたのだろう。仕事を速やかに片付けると、思い思いの方向に散っていった。結羽はフランス・パリまで遊びに行った。ここは、材料研究課に所属していたときに、テロが発生して行けなくなってしまった場所だった。国際会議には出席できなかったが、ここに来られたことでようやく二年越しの夢が叶ったような気がした。凱旋門に上ると、そこには新婚旅行中と思われる日本人のカップルがいて、久しぶりに微笑ましい気分になった。

スペインのアルメリアへは、結羽だけが別の調査をすることになっていて一人で訪れた。ここは、首都マドリードから四〇〇キロほど南の地中海に面した小さな港町であった。マドリードからは五〇人乗りの小さなジェット機しか飛んでおらず、そんな地方路線に日

本人の乗客が物珍しいのか、知らない男性が結羽に声を掛けてきた。アルメリア空港は非常に小さく、飛行機を降りると地上から直接小屋のようなターミナルへ行くように促された。歩いていくとすぐ空港の出口にたどり着いてしまったため、観光カウンターへ戻って「地図がほしい」と頼んだ。実は、日本のガイドブックにはアルメリアという小さな町は載っておらず、インターネットでダウンロードした航空写真しか持っていなかったのだ。しかし、手渡された地図はスペイン語で書かれており、全く読めなかった。仕方がないので、ホテルの名前と住所を余白に書き込み、それをタクシーの運転手に見せた。ホテルまでの道中、運転手はスペイン語で色々話しかけてきた。スペイン語の地図を持っていたので、スペイン語が理解できると勘違いされたいらしい。車内には日本でも有名なジブシーキングの音楽が流れていたが、運転手の親切な観光案内は残念ながら全く理解できなかった。ホテルではさすがに英語が通じてホッとしたが、一歩外に出ると全く英語が通じなかった。しかし、それがかえって新鮮で面白かった。

結羽は、タクシーで一度痛い目に遭っていた。一回目のオランダ出張の時に、アムステルダム駅前からタクシーに乗った。しかし、そのタクシーが無許可の「白タク」だったのだ。しかも、運が悪いことに、結羽が乗っているときに車をガードレールにこすってしまった、運転手が怒り出してしまったのだ。二キロほどの距離で五〇ユーロと法外な値段を請求されたのだが、結羽は怖くなってその金額を払って、逃げるようにタクシーから降りたのであった。しかも、ホテルに着くと、オーバーブッキングで部屋がないと言われた。ホテルのポーターは、二件隣にあるウィークリーマンションのようなところへ案内してくれた。そこは四大家族で泊まって也十分なくらい広い部屋なのだ。事情がよくつかめず不安になったので、再度ホテルのロビーに戻って聞いてみると、オーバーブッキングはこちらのミスだから、その広い部屋にシングルの料金で泊まっても良いと言っただ。タクシーでポツタクられて運がないと思っていたが、ホ

テルでは予期せぬグレードアップに恵まれ、結果的には得をしたのである。タクシーに関しては、車内に料金メーターがあると安心して乗っても良いことがわかり、スペインでもそれだけは注意してタクシーを利用した。

海外調査の話が長くなってしまったが、車内の仕事でストレスを溜めていた結羽にとつて、他社との国内・海外最新機種・技術調査、博士号取得に向けたK大学での勉強、そして城之内あゆみとの交際の三つが日々のモチベーションになっていた。あゆみとの交際も四年目になっていたが、テーマパークへ遊びに行ったり、温泉で一時的を過ごしたり、週末にドライブに行ったりと、二人の時間を楽しんでいた。

六の（一） ストレスと別れ

六

企画第三課で働いているうちに、文系の人と理系の人で仕事のやり方が違うということがわかってきた。課長はずっと理系の藤原課長だったが、部長は最初の一年半が文系の栗山部長、次の一年半が理系の下村部長だった。文系の栗山部長の場合は、企画書のアウトラインだけ持っていて受けてもらえなかった。とにかく、完成版に近いものでないと見る気にならないと言われた。こういうのを「レンガ積みタイプ」と言うのだろう。完成に近いところまでレンガを積み上げないと、それが暖炉なのか、家の外壁なのか、塀なのかかわからない。しかし、途中で積み間違えたレンガがあると、上に積んだレンガを崩して積み直さなければならない。栗山部長は納得がいかないところがあると、部下の苦労もお構いなしに平気でレンガを崩してしまうのであった。ある時は、部署ごとに集計した予算を棒グラフで見せるのが良いのか、円グラフで見せるのが良いのかを決めるだけで、部長が納得するまで八時間も議論に付き合わされたこともあった。何度も何度もレンガを積み直す結羽の負担は尋常でなく、残業時間も必然的に多くなっていた。しかし、栗山部長が満足のいく塀ができると、その塀が部下の結羽たちを守ってくれた。ハシゴを外す藤原課長とは違って、栗山部長が全て責任を取ってくれたのだ。重要な会議を無事に終えることができた時にはきちんと結羽たちを慰労してくれるなど、意外に人間味のある一面も持っていた。ただ、目上の人にはゴマをすることは、藤原課長と何も変わらなかった。

一方、理系の下村部長の場合は、企画書のアウトラインだけ持っていくと、途中の段階でも良し悪しのジャッジをしてくれた。そういう意味では、だいたいの形を針金で作ってから、その外側に粘土

を付けていくことで像を完成させる「粘土塑像タイプ」と言えるだろう。針金の段階で右手を上によびたいと言われれば、その通り曲げてから粘土で肉付けすれば良かった。レンガ積みとは違って、最初から完成版を作る必要がなかったのだ。結羽の負担も大幅に減った。しかし、精神的なストレスは、むしろ下村部長の時の方が大きかった。その原因は、部長が善し悪しをジャッジする根拠が全く理解できなかったからだ。例えば、ある新しい技術開発にトライしてみてもどうかと提案すると、いきなり「その技術開発はやらなくてもいいの！」と怒り出すことがあった。しかし、何故その開発をやる必要がないのか聞いてみても、具体的な理由を教えてくれないのだ。「とにかくやらないの！」の一点張りなのである。その開発は営業課からぜひやってほしいと言われており、「何故その開発をやってくれないのか！」と叱責されることもあった。その板挟みになったのが結羽だったのである。ある時は、実用化が無理だとわかっている研究に対して「継続してやるべきだ！」と言い出し、多額の予算を付けることもあった。栗山部長と違って、人間味が全く感じられない人だった。

そんな中、新規電池材料の開発をしていた材料研究課の研究もおかしな具合になっていた。結羽がいた頃は、一ミリアンペアの電流しか取り出すことができず、材料のさらなる改良が必要な状況だったが、その後五〇ミリアンペアの電流が取り出せるようになっていた。性能向上はもちろん喜ばしいことであつたが、まだ実用レベルの一〇の一以下の性能だった。ところが、無停電電源装置（UPS）のシステム開発を始めてしまったのだ。性能が十分に出ていないため、T社と共同で開発したいという電池メーカーや重電メーカーは現れなかった。チャレンジすること自体は悪くないが、そんな簡単に実用化できるほど現実には甘くなかった。予想通り、システム開発は失敗してしまったのである。電気屋が設計に携わらず、材料屋だけで作ってしまったので、当然の結果と言えばそれまでだった。しかし、魚谷課長を含めた上層部は開発の失敗を認めようとせず、あ

くまでシステム開発の継続にこだわったのだ。絶対に実用化する見込みがない開発に、どうして年間数億円もの大金が平然と使われてしまうのだろうか。他にも多くの予算が無駄な研究開発に投資されているのを見て、結羽はT社に愛想を尽かしてしまい、この頃から「T社を辞めたい」と思うようになっていた。しかし、すぐに辞めても行く先がなかった。少なくとも、他社の研究所に転職する場合は、博士号の取得が必要が多かった。したがって、学位取得までは歯を食いしばってT社で頑張るしかなかった。

六の(二) ストレスと別れ

その頃、結羽は交際相手の城之内あゆみのことでも悩んでいた。交際期間が四年半にも及び、彼女も二三歳になった。普通であれば、そろそろ結婚の話が出てきてもよかった。しかし、丁社を辞めたいとも思い始めた頃でもあり、学位取得できるまでは精神的にも余裕が生まれそうにもなかった。結羽から結婚の話をするのはなかった。また、仕事や転職の話で相談相手にならなかったのも悩みの一つだった。確かに、高校しか出ていない彼女に結羽の悩みの全てを理解してもらうことは不可能だった。しかし、こういう時に相談相手にならないと、将来の子育てや家計を任せられないのではないか、という不安もあった。また、性格の違いもだんだんわかってきた。結羽はどちらかというと一人でいる方が気楽に思う方だった。友達といえるときでも、四人以上で一緒に行動することはなかった。しかし、あゆみは大人数の輪の中にいるのが好きだった。あゆみは突然、ダンスサークルに入りたいと言い出した。結羽は、付き合っているからといって、全て同じことをしなければいけないとは思わなかった。お互いがやりたいことを尊重し合って好きなことをやればいいと思っていた。結羽もダンスサークルに入らないかと誘われたが、大人数の話の中に入るのが嫌だったし、そもそもダンスに興味がなかった。その誘いを断った。しかし、彼女のサークルが試合やイベントに出るときには、自分の時間を削ってでもそれを応援しに行った。彼女も足を運んでくれることを喜んでいるようであった。しかし、次第に彼女とデートする日より、彼女がサークルに参加する日の方が多くなっていった。結羽も博士論文の作成がヤマ場を迎えていたが、二人の時間が少なくなっていることに、何となく不満を感じるようになっていた。

仕事でも恋愛でも悩んでいた結羽は、ストレスをどんどん溜めていった。結羽は酒が強い方だったが、これまでは飲み会のときくら

いしか酒を飲むことはなかった。しかし、この頃から仕事で嫌なことがあると家で飲むようになっていた。と言っても、三五〇ミリリットルの缶ビールを一本飲むだけで気が晴れたので、このくらいなら「酒は百薬の長」だと思って飲んでいた。ところが、結羽は事件を起こしてしまったのである。その日は例のごとく藤原課長にハシゴを外され、かなりフラストレーションが溜まっていた。気を晴らすようと、普段は決して行くことのないスナックへ足を運んだ。あゆみに話しても良かったが、結羽の愚痴を聞いている方も面白くないだろうし、心配されると余計に精神的な負担が大きくなるような気がしたので、自分とは全く関係のないスナックの若いホステスに愚痴をこぼすことにした。そのスナックは、以前先輩社員に無理矢理連れて行かれたところで、その時が二回目だったが、相手のホステスは結羽のことを覚えていた。彼女は結羽の話をわかったような、わからなかったような曖昧な表情で聞いていたが、それがかえって良かった。とにかく悩んでいるときは飲んだ方が良いと言われ、結羽はそこで相当な量の酒を飲んだ。終電の時間になったので、その店を離れ、電車で家路に着いた。

電車の中では眠ってしまったため、記憶が戻ってきたのが自宅の最寄り駅だった。まっすぐ歩けないほど酔っ払っていた。すると、突然「どすん」と何かにぶつかったような鈍い音がした。

「ちよつと、何するのよ！」

と女性の声が聞こえた。酔っ払っている結羽には何が起こったのかすぐに理解できなかった。その女性は結羽の腕をつかみ、そのまま交番へ向かった。交番に着くと、女性が警官に一生懸命何かを説明していた。それが一通り終わると、警官が結羽の前に来て、事情を説明してくれた。どうやら結羽がふらふら歩いていた先に女性がいて、思いっきりぶつかってしまったらしい。女性は故意だと主張しており、傷害罪でも迷惑防止条例でも何でもいいから被害届を出したいと言う。しかし、結羽が酔っ払っているのは明らかであり、故意というのはあり得なかった。警官にスナックの話をし、その証拠

に呼気中のアルコール濃度を測定してもらった。その結果、酒酔い運転で免許取り消しになってしまうくらいの高濃度のアルコールが検出された。結局、この時点では被害届が出ていないということで、すぐに釈放された。結羽は帰宅後家族と相談し、謝りに行った方が良いということになった。しかし、ただ謝るだけでは許してくれないこともあり得るので、翌日弁護士のところへ相談に行った。弁護士の話では

- ・怪我をしていないのであれば、傷害罪は適用されない。

- ・迷惑防止条例違反は痴漢などの軽微な罪でも適用されるので、これで被害届を出されると男性側が不利になる。

ということ、もし後者の対策をするならば、一般的には五〜一〇万円の示談金で解決することが多いとのことであった。そこで、一〇万円を包んだ封筒を持って、謝りに行くことになった。先方の自宅を訪れると、女性の父親が出てきた。その女性がまだ二〇歳で、当人同士がやると話がおかしくなってしまう恐れがあるので、父親が対応することであった。スナックへ寄ったことから正直に話すと、先方は最後まで黙って話を聞いてくれた。そして、すべてを話し終えると、

「わかりました。しかし、問題を起こしたのは事実なので、何らかの形で謝意を示していただければ、この話はなかったことにしましょう。」

と言った。そこで、結羽は一〇万円の入った封筒を先方に渡した。先方も弁護士から相場を聞いていたようで、金額を確認すると納得した顔になった。

「それでは、これで示談成立と言うことで、お帰りになっても結構です。」

と言われたので、結羽は頭を深く下げ、その場を後にした。その後、警察に呼ばれることもなく、事件は一応解決した。

しかし、結羽の心に残した傷跡は深かった。気を晴らすために飲んだ酒が、かえって気を重くしてしまったというのが皮肉だった。

こうなると、ストレス発散の手段がなくなってしまう、ストレスがどんどん溜まっていく一方になってしまった。結羽の表情から明るさが消えてしまったのは、誰の目からも明らかだった。それを一番敏感にキャッチしたのが、交際相手の城之内あゆみだった。結羽は事件のことを彼女に一切話さなかったが、あゆみは結羽の元気がなくなっていくことを心配していた。しかし、六歳下の彼女は相談相手にはなれず、デートの時に一緒に楽しく過ごしてあげることしかできなかった。ただ、この時の結羽は将来のことを考える余裕もなかった。あゆみが一緒にいてくれるだけで嬉しかった。結婚のことは、もう少し気持ちの整理ができた段階でゆっくり考えようと思っていた。

事件から五ヶ月ほど経って、ようやく結羽の気持ちがようやく落ち着いてきた。相変わらず、会社では嫌なことばかりでストレスが溜まる毎が続いていたが、酒も上手に飲めるようになり、チャレンジしている博士論文も完成に近づいていた。将来についても少しずつ考える余裕が出てきたところであった。しかし、ある日突然あゆみから

「正和に対する気持ちがなくなっちゃった。ごめんなさい。」と携帯メールが届いた。最初は何が何だかわからず、一度会って話がかしたいと伝えた。その翌日、結羽はあゆみと会った。話を聞くと、彼女も半年ほど結羽との性格の不一致を悩んでおり、このままダラダラ付き合ってもその後の進展はないと思うから、一度別々の道を歩んでみて、将来のことを考えてみたい、ということだった。結羽は、あゆみという心の支えを失うことはとてもショックだったが、自分も同じことを思っていたので、彼女の言う通り別れることにした。その日は、五時間ほど話しただろうか。付き合っている間はほとんど喧嘩することのない二人だったが、付き合ってから初めて本音で話し合えたような気がした。こういう本音での会話がもっと前にできていれば、その後もずっと一緒にいられたかもしれないが、「時すでに遅し」といった感じだった。あゆみとの交際は、ちょう

ど五年でピリオドを打つことになった。

七の（一） 変化と挑戦

七

あゆみと別れて一ヶ月後、結羽は一人暮らしを始めることにした。事件のことで家族に迷惑をかけたという後ろめたい気持ちがあったのも確かだったが、それよりも何かを変えないと自分も変わらないような気がしたからだ。博士号の学位を取得するのはもう少し先になりそうだったし、会社の部署や上司、仕事内容などは自分で変えることができないので、この時点で変えられるのは住む場所くらいだった。彼女と別れてから一ヶ月後の一人暮らしは余計に淋しくなるように思えたが、自分自身のことをゆっくり見詰め直すにはちょうど良い機会になると前向きに考えていた。また、これまで実家暮らしでほとんどやってこなかった料理や洗濯、掃除も、実際やってみると意外に楽しく、新しい自分が発見できたような気がして嬉しかった。

引越してさらに一ヶ月すると、職場にも変化が現れた。企画第三課に奥村という新しい人が入ってきたのだ。歳は結羽より一つ上だったが、博士課程を出ていたので、入社は結羽より二年遅かった。彼は電気工学を専攻しており、入社してからも通信研究課で仕事をしていて。しかし、T社で博士号を持っている人はみんな研究課で活躍していたのに、何故企画課へ移動してきたのか、少し不思議だった。また、結羽がいるにもかかわらず、同じ課に同世代の奥村が来たのも変だった。ある日、入社二年目で通信研究課の男が資料を持って彼のもとに来た。上手く業務の引き継ぎができておらず、前任の彼にわからないことを聞きにきたらしい。しばらくすると、

「何故こんなことがわからないの！ 何回も言っただでしょ！」と凄まじい怒号が聞こえてきた。普段から奥村のことを喜怒哀楽が

激しい奴だな、と思つて見ていたが、あそこまで感情をむき出しにして怒り出す人を初めて見たような気がした。後になってわかったのが、彼の異動理由が「後輩社員へのパワーハラスメント」ということだった。そのやりとりだけ見ていても何となくわかるような気がしたが、歳が五つくらいしか離れていないのにパワーハラが起こってしまうこと自体、衝撃的だった。彼は見るからに運動音痴な感じがしたので、おそらく部活動などで厳しい上下関係を経験する機会がなかったのだろう。上司に対する態度も「その言い方はあり得ないだろう」というものが多く、仕事のやり方も一番ラクできる方法を安易に選択して反感を買うなど、社会人としては既に失格といった感じだった。

例えば、企画第三課では安全装置に関する技術調査をM総研という会社をお願いしており、奥村が移動してきてからは担当者が結羽から奥村に変わっていた。技術調査の報告書を三月末にいただく必要があったのだが、M総研では年度末の業務が忙しいという話を聞いていたので、結羽は報告書の締め切りを三月一五日に設定し、万が一遅れても月末には間に合うようにしておいた。案の定、一五日には間に合わないので、五日ほど締め切りを延ばしてほしいと先方からお願いがあった。しかし、奥村は何故一五日に間に合わないのか、必要以上に先方を問い詰めた。しかも、社外の人なのに、言い方が社内の通信研究課の後輩社員を叱りつけるのと同じ口調なのである。結羽はさすがにまずいと思い、奥村が出張で不在の日にM総研に電話し、こちらの非を詫びて二〇日に報告書をいただく約束をした。その後も、請求書発行のお願いも電話で丁寧にするばいいところを、命令調の電子メールを一方的に送ってしまうなど、相手に対して平然と失礼なことをしてしまう男だった。

また、他の仕事で奥村は資料を作っていた。それは、役員向けに説明する重要な資料で、下村部長や藤原課長と何度も打ち合わせをして資料を作成していた。最終段階に差し掛かったとき、藤原課長は同じ資料で「コンピュータ」と「コンピューター」のように、語

尾の長音符号の有無が揃っていないことに気がついた。J I S の Z 八三〇一では、「英語の語末の e r、o r、a rなどはア列の長音とし、三音以上の場合には語尾に長音符号を付けない」と決まっているので、長音符号を統一して消そうということになった。しかし、次の日に奥村が作ってきた資料ではこうなっていた。

「コンピユタ」

一瞬、何を書いてあるかわからなかったが、彼の話を聞いてやっと理解できた。どうやら、ワープロの「全置換」という機能を使って、長音符号を全部消してしまったらしい。確かにこの機能を使うのが一番ラクに仕事が片付くかもしれないが、語尾以外の長音符号が消えてしまうのは一目瞭然で、それに気づかずにそのまま課長のところへ持っていくてしまうのは問題だった。「ドクターは使えない」と言い出す人も出てきたが、若い頃からそのように言われてしまふ彼も少し気の毒だった。

そんな奥村にも彼女ができた。すると、中学生や高校生でもないのに、彼は彼女ができたことを周りに自慢し始めた。三〇歳を過ぎてもそんなことをしているのはとてもみっともなかったが、彼は見るからにモテナさそうな感じだったので、もしかすると初めてできた彼女だったのかもしれない。結羽は何度も彼女が写っている写真を見せられ、うんざりしていた。彼は、部長や課長が同席している飲み会でもその写真を見せびらかしており、とても幼稚な男だった。すぐに結婚を決めてしまい、新婚旅行に行くという話になった。しかし、藤原課長と相談せずに大事な会議の一週間前に新婚旅行へ行くことを決めてしまったため、課長はもの凄く怒っていた。奥村は、かなり空気が読めない男だったのだ。新婚旅行から帰ってくる、結羽たち同僚にぜひ新居に遊びに来てほしいと言い出した。写真を見る限り、奥村の相手はお世辞にも美人ともかわいいとも言えない女性だったが、どうしても見せたいらしい。しかし、あまり気が進まなかった結羽は、いろいろ言い訳をしながら彼の誘いを断った。そのうち、子供ができたと言って誘われなくなった。子供がで

きたことも何度も聞かされ、次第に結羽は彼を遠ざけるようになっていった。

奥村が企画第三課に来てからは、精神的な負担は彼の方に集中するようになり、結羽の仕事のほとんどが彼の面倒を見ることになっていた。会社も結羽に奥村を更生させることを期待して、敢えて同世代の二人を同じ課に配置したようだったが、改善の兆候は一向に見られなかった。結局、当初の予定から三ヶ月遅れで、結羽は材料研究第二課に異動することになった。

材料研究課は元々一つの課であったが、電池関連はシステム開発で規模が大きくなったため、電池以外の研究は第二課で行うことになった。以前、結羽は電池関連の仕事をしており、その時の成果を博士論文にまとめている最中だったので、電池関連の材料研究第一課に行くとはかり思っていた。しかし、下村部長から移動の辞令をもらうときに

「君に電池関連はやらせないからね。」

と言われた。何故結羽が電池関連の研究をやっては駄目なのか、理由はやっぱり教えてもらえなかった。しかし、第一課では実用化の見込みがないシステム開発を相変わらず続けていたので、そんなところで仕事をするよりも、第二課で新しいことを始めた方がおもしろいかもしれないな、と思った。材料研究第二課では、前任者の倉本から空調機器のテーマを引き継いだが、これも丁社の研究らしく実用化の目的が曖昧なまま続いているテーマであった。倉本は工作が好きだったのか、評価装置は素晴らしい物が出来上がっていた。しかし、肝心の空調機器の性能評価が行われていなかったのである。結羽が評価してみると、いきなり従来よりも三割ほど高い性能が出た。コストや耐久性の面で大きな課題があり、商品化は難しそうであったが、それでも性能が出たのは事実だったので、久しぶりに成果を論文にまとめ、学術雑誌へ投稿した。相変わらず社内から論文を評価されることは全くなかったが、社外からは大きな反響があった。そのほとんどが大学の先生からであったが、懇親会の場合などで

色々な先生とお話ししていると、研究の話で意気投合することが多かった。企画課にいたときに大手二社の人と仕事の話しているときも楽しかったが、それよりも大学の先生と研究の話をしているときの方がずっと楽しかった。何人かの先生とお話しするうちに、博士号取得の意義がようやく見えてきた。

「そうだ、大学教員を目指そう。」

この頃になると博士論文はほとんど完成しており、K大学の池江教授から修正を求められることも少なくなった。社会人ドクターの場合は、三年間の博士課程の倍以上の時間、すなわち六年以上をかけて博士号を取得することがアンリトゥン・ルールとして知られていた。修士課程修了が二四歳だったため、博士号取得は早くても三〇歳ということになる。結羽も年度末でようやく三〇歳になる予定だったので、ようやく審査してもらえることになった。博士論文は主査の池江教授の他、副査二名の教授から合格をもらわなければならなかったが、副査の先生からは少し修正を求められただけで、あとは公聴会と学位授与式というイベントを経て、正式に「博士」になれるところまで来ていた。

七の(二) 変化と挑戦

一人暮らしを始めてからも、しばらくは電車通勤を続けていた。

自転車で三〇分のところに部屋を借りたので、自転車で通おうと思えば通うこともできたのだが、ある女性が気になっていていたため電車通勤を続けていた。あゆみと付き合っている頃からずっと同じ通勤電車に乗っていた例の女性であった。一人暮らしを始めても会社の最寄り駅が変わるわけでもないので、相変わらず同じ電車に乗っていた。その駅は普通電車しか止まらない駅なのだが、ある日のダイヤ改正でその一つ前の駅に急行電車が止まるようになった。

すると、彼女は一つ前の急行電車に乗るようになったのである。結羽は彼女の姿を確認すると、いつもは乗らない急行電車に乗った。

そして、彼女を観察していると、一つ前の急行停車駅で下車したのである。その駅と会社の最寄り駅は七〇〇メートルしか離れていないため、歩いても一〇分程度しかかからなかった。彼女は急行が停車するのを機に、ウォーキングを始めたようであった。ストーカーのように後を付け回すのは良くないと思ったが、自分だってこれを機にウォーキングしてもいいだろうと思い、結羽も一つ前の駅で降りるようにした。彼女の会社は結羽の会社と道を挟んで反対側にあるように、駅を出ると目の前の横断歩道を渡った。自分は渡る必要がないので、そのまま道に沿って歩くことになるのだが、七〇〇メートルは併走するような形になり、結羽はその女性を見ながらウォーキングするのが密かな楽しみになった。

そんなことを一ヶ月もしていると、本当にその女性のことが気になって仕方がなくなってしまった。まだ話したことはなかったが、以前会社の同僚の人とお話している感じも良かったし、顔も結羽好みだった。身長が低い点だけが不満だったが、それでもファッションにもこだわりがあって、決して子供っぽく見えないところがかえって魅力的に見えた。しかし、電車の中で突然声を掛けたら変だ

と思い、どうしても知り合いになれるか、ということばかり考えるようになった。

その時、学生時代に不思議な出会いがあったことを思い出した。結羽は、学生時代も電車でNK大学へ通っていた。ある日、帰りの電車で英語の論文を読んでいると、何かが手に当たったような感覚を覚えた。すると、

「ごめんなさい。くすぐったかったでしょう。」

と隣に座っていた女性から声を掛けられた。別にそんな感じはしなかったたので、結羽は

「そんなことないですよ。気にしないで下さい。」

と答えた。普通であれば、ここで会話は終わりになったであろう。

しかし、彼女は続けて

「難しそうな文章を読んでいるんですね。」

と結羽が読んでいる英語の論文に関心を示した。その論文は、翌日のゼミで紹介しなければならなかったたので、慌てて電車の中で読んでいるものだった。ただ、こんなものに興味を示す女性も珍しいと思ひ、その女性と大学のゼミの話をした。彼女はN駅のT百貨店で販売員をしているということで、その話をしてくれた。自宅の最寄り駅に近づく、

「ここで降りますので。」

と彼女に伝えると、彼女は

「これは私の連絡先です。良かったら連絡下さい。」

と言って、結羽にメモを渡した。ゆっくりしていると乗り越してしまいそうだったので、結羽は返事もせずにそのメモを受け取って電車から降りた。

家に帰ってメモを見返してみると、そこには携帯電話の番号とアドレスが書いてあった。とりあえず、携帯メールで結羽の連絡先を送ってみた。すると、彼女からいきなり電話がかかってきた。風呂場からかけていると言つのである。裸の女性と話していると思うと少し不思議な感じがしたが、何となくその女性に興味を持つように

なった。

二週間ほど携帯メールの交換をして、もう一度会うことになった。待ち合わせ場所はＴ百貨店の最上階にあるレストランにした。そこで、結羽は彼女の顔を初めてじっくり見た。電車に乗っているときは横に並んでいたので、彼女の顔をよく見ていなかったのだ。顔はあまり好みではなかったが、とりあえず夕食を食べながら話をすることにした。しかし、電車で話したときとどうも印象が違っているのである。まず、彼女は自分の話を一方的にするタイプで、結羽の話をなかなか聞こうとはしなかった。結羽もどちらかと言えば話す方が好きなので、全く会話が噛み合わなかったのである。彼女の話辛抱して聞いているうちに、徐々に退屈な気分になっていった。レストランから出ると、外はもの凄い暴風雨に見舞われていた。駅へ行くと、電車が止まっているとのことだった。二人はＮ駅で足止めされてしまったのだ。しかし、何となく彼女と一緒にいたくなかった。彼女も結羽に失望しているようだった。しかし、結羽が彼女を置いて何処かへ行くわけにもいかなかった。すると、彼女は

「この近くに友達の家があるので、ここで失礼してもいいですか？」

と言った。彼女から切り出してくれたので、結羽も断る理由がなかった。本当に友達の家があるのかどうかわからなかったが、結羽は彼女とそこで別れて、NK大学で一夜を明かした。その後、彼女から連絡は来なかったし、結羽も連絡をすることはなかった。

そんな学生時代の不思議な出会いを思い出し、何か声を掛けるきっかけさえあれば、それ以降の会話が続くような気がした。そこで、結羽は落とし物を用意し、彼女の物でないかを確認することで声を掛けることにした。このアイデアが不自然かどうかはわからなかったが、これしか思い付かなかったのやってみるしかなかった。

アイデアを思い付いてからは、何度も頭の中でシミュレーションをした。そして、いざやってみようと思うと、その日は雨が降ってやめてしまったこともあった。そんなことをしているうちに、あつ

という間に一ヶ月が経ってしまった。しかし、結羽は諦めなかった。ある日、自分の気持ちとシチュエーションがピッタリと合う瞬間が訪れた。勇気を振り絞って、彼女に声を掛けた。

「すみません。これ、落としませんでしたか？」

彼女の答えは

「落としていませんよ。」

というものであったが、これはもちろん想定内。

「いつも同じ電車ですよね？　自分は急行が止まるようになってから歩くことにしたのですが、同じような人がいらっしやるなあ、って思っていたんです。」

「私も急行が止まるようになってからですよ。一緒ですね。」

と笑顔で返してくれた。その後、会社に着くまでの一〇分間、話が途切れることなく、たわいのない世間話が続いた。別れ際に、自分の連絡先を書いた名刺を渡すと、笑顔で受け取ってくれた。

「私は事務職で名刺持っていないんですよ。でも、会社はこのB電子工業で、名前は蒲田めぐみです。」

と教えてくれた。

会社名も名前も教えてくれたので、これで仲良くなれると結羽は安心して切っていた。しかし、次の日はうまくいかなかった。電車が遅れていて、いつもより混んでいた。いつも通り結羽が電車に乗ると、彼女の姿が見られなかった。もし声を掛けたことを気味悪く思っていて、彼女が乗車位置を変えてしまったら、それ以上追うのはやめようと決めていたので、もしかすると一瞬で恋が終わってしまったのかな、と思った。降車駅で電車を降りてから後ろを振り返ると、彼女はまだ電車の奥の方にいた。しかし、いつもより人が多かったので、そこで待っているわけにもいかなかった。結局、結羽は先に駅を出てしまったのだった。後ろから声を掛けてもらえるのを期待したが、彼女は結羽に話し掛けることはなかった。その日は、前々日までと同じように一人で歩いて会社へ向かったのだった。

その次の日は、前日の失敗を繰り返さないように、彼女の姿を確認してから電車に乗った。運良く、彼女の真横に行くことができた。彼女は流行りのデジタルオーディオプレイヤーで音楽を聴いていたが、ためらわず声を掛けた。

「おはようございます。」

めぐみは少し驚いた表情をしたが、すぐ笑顔に戻って挨拶を返してくれた。何を話そうかと思ったが、ちょうど彼女が音楽を聴いていたので、好きな音楽の話になった。その日は電車の中から話し始めたので、会社に着くまで二〇分くらいお話しすることができた。それだけで、結羽は嬉しくなったのであった。

次の日は結羽が出張で、いつもの電車に乗ることができなかった。そして、週が明けた月曜日の朝。いつもの電車に乗ると、彼女の姿はなかった。今日はお休みなのかな、と思っていると、隣のドア付近に彼女の姿を見つけた。ドア一枚分だが、乗る位置を変えたのだ。これをどう解釈していいのか、わからなくなった。会話しているときは、そんなに嫌な顔をしていなかったたので、嫌われていないと思っていたのだが、彼女の本心はわからないのだ。彼女が乗る位置を変えた理由としては、

・彼女が乗る駅で電車の停止位置がずれたため、乗車位置も一つずれた。

・自分に限らず男性に接するのが苦手で、普段から避けがちだ。
・自分に話し掛けられるのが嫌だ。

の三つが考えられた。もちろん、一つ目の理由であれば、次の日からまたお話しできるようになるだろう。問題は二つ目と三つ目の違いはわかりようがなかった。しかし、二つ目の理由は結羽がかなりポジティブに考えた理由であって、普通に考えれば三つ目の理由が正しいような気がした。

仕方がないので、もし話すことができたなら正直に理由を聞こうと思った。その翌々日にめぐみと同じ位置に乗車することができたので、勇気を振り絞って話し掛けてみた。

「おはようございます。あの、こうやってお話し掛けるのはご迷惑ですか？」

「いや、そんなことないですけど……。」

「でも、電車の乗車位置を変えられましたよね？」

「えっ、車両は変えてませんよ。」

確かに車両は変わっていない。変えたのはドア一枚分である。もしかすると、深い意味はないのかもしれない。しかし、それ以上聞くと嫌らしくなると思い、ちょうど途中の火災現場で消防車が消火活動をしていたので、その話題でその日の会話は終わった。

次の日はホワイトデーだった。会社の同僚から義理チョコをもらっていたので、そのお返しを持って行かなければいけなかったが、その年は一つ余分に持って行った。もし、めぐみに会ったら、さりげなく渡そうと思ったからである。その日は何故か元の位置に乗っていたので、話し掛けることができた。昨日起こった火事が新聞に載っていたので、その話の続きをしたりした。そして、別れ際に「会社の同僚にホワイトデーのお返しを買ってきたんですが、一つ余りがあるのでどうですか？」

と言ってみた。彼女は申し訳なさそうな顔をしながら、それでも結羽のプレゼントを受け取ってくれた。結羽はその中に、メモで携帯メールのアドレスを入れておいた。正直、彼女と乗車位置で駆け引きするのに疲れ始めていた。それなら、一層のこと連絡先を教えておいて、連絡があれば親交を深めていけば良いし、連絡がなければ諦めようと思ったのである。彼女に意志決定をしてもらうというのは少し卑怯な手のような気もしたが、結羽にはこれ以外にアイデアが浮かばなかった。その夜、彼女からのメールを待ったが、何も来なかった。

その後、彼女の姿を見なくなった。完全に乗る車両も時間も変えてしまったのかもしれない。しかし、それを追い掛けるようなことはしなかったし、絶対にしたくなかった。彼女との接点は二週間しかなかったが、五年近く気になっていた女性との小さな恋愛は終わ

りを告げたのであった。

八の（一） 転職

八

入社直後に材料研究課に配属されたときは仕事が楽しく感じられたが、企画第三課から材料研究第二課に戻ってきてからはつまらなく感じるようになっていた。ここでは前任者の倉本から空調機器のテーマを引き継いだのだが、実用化の見込みがないことがわかってしまっていたからである。企画課に在籍したことで、どんな研究開発が会社のため、世のため、人のために役に立つのかがわかるようになり、とても勉強になったのだが、改めてT社の研究テーマを見渡してみると本当に無駄なテーマが多く、がっかりすることが多かった。そんな状況なのに平然と無駄な研究を続けている人と当然気が合うはずもなく、結羽は研究課の中でも孤立している感じだった。空調関係のテーマでは、成果を論文にまとめて学術雑誌にて発表することができたのだが、実用化する見込みは全くなかったため、無駄なテーマは続けてはいけないというメッセージを発信する意味を込めて、このテーマを途中で打ち切ることにした。周りから「まだ続けられるのに」と残念がる声が聞かれたが、結羽はもっと会社のため、世のため、人のためになる仕事があった。そこで、一年間頑張つてテーマを探してみても、それでもやることがなかったら会社を辞めようと、心の中で決めた。

研究課には、新規材料を開発してメーカーへ販売するなど、新しいビジネスモデルを創出するミッションがあった。そこで、組織や予算を守るために辞められないテーマは放っておくとして、商品化や実用化にチャレンジする新しいテーマを研究課の有志で考えるプロジェクトを立ち上げることにした。川崎研究部長に趣旨を説明すると

「まあ、好きなようにやりなさい。」

と言った。この言葉だけを取ると、了解を得たように思えたが、実際は人ごとのような発言だった。結羽は川崎部長が嫌いだった。以前、空調機器の成果を論文にまとめたときに、その内容を説明したことがあった。研究課から成果が出たことに対して喜んでくれると思っていたのだが、実際の反応は全くなかった。それだけではなく、一生懸命している結羽の説明を途中で遮り、「好きにしなさい」と言ったのだ。反応が芳しくないのは仕方がないと思っていたが、話を途中で遮られたのは初めてで、随分自分勝手な人だなと思った。また、研究課の課題について話し合っているときでも、川崎部長はまるでテレビのコメンテータのような他人事の発言ばかりで、とても自分の部署のことを真剣に考えているような感じではなかった。

また、川崎部長になってから研究課内の人事異動が多くなった。五年の研究プロジェクトを進めていたが、途中の三年で異動させられ、達成感がないままに次の仕事に変わってしまった人もいた。多くの分野で専門性を磨いてほしいという期待を込めて異動させるのであれば良いのだが、その場合はプロジェクトが終了したときなどに本人が納得のいく時期に異動を発令するのが普通であろう。しかし、部下を将棋の駒のように扱い、「あと動かしていない駒はどれかな」なんて口ずさんでいる川崎部長を見ると、異動させられた人も到底納得できるものではなかった。

そんな川崎部長は無視することにして、次に課長へプロジェクトの趣旨を説明した。しかし、ここでは賛同が得られなかった。

「総論は賛成だが、すぐに成果が出そうにないので、やっても無駄ではないか。」

という意見が大半を占めた。現在実施しているテーマは、実用化に向けて苦労はしているが、長年の経験から少しずつ成果が出るので、これらを継続した方が良い、というのが彼らの主張だった。しかし、結羽から見れば、これらのテーマは実用化の可能性がないのに、組織や予算を守るために続いているものばかりであったので、それは違うテーマを立ち上げたいのだ。ただ、議論をすればするほど、

既得権を守るのに必死な課長の姿しか見えてこなかったので、課長への説得をやめることにした。

そうになると、次は係長である。係長は結羽と歳が比較的近かったので、最初はプロジェクトの趣旨に賛同してくれる人が多かった。しかし、最初に出てきた企画書は、現行テーマを焼き直したものでありであった。

「これでは今と何も変わっていません。もっと奇抜なアイデアでお願いします。」

と言っても、新しいテーマは何も出てこなかった。「係長でも駄目か」と思ったが、彼らの普段の業務を見ている限り、期待する方が無理だった。一人の女性係長は、結羽と同じ材料研究第二課で、金属材料の耐熱性に関する研究をしていた。ある時、営業課から

「このステンレス材料の耐熱性がもう少し向上すれば、他の部品と同じタイミングでメンテナンスできるようになるので、何か良い方法はないか。」

という相談が来た。この女性係長は、色々な合金を実験し、一ヶ月後に次のような結論を出した。

「このニッケルベースの合金を使えば、耐熱性が飛躍的に向上します。」

ステンレスよりもニッケルの方が耐熱性に優れることは誰でも知っている。しかし、コストが一〇倍以上になってしまうのも明らかなのだ。営業課は同じコストで何とかならないかと暗に言っているわけ、そんな高価な材料が使えないことは少し考えれば誰でもわかるのであった。この件で営業課は怒ってしまい、その後相談が来ることはなかった。これは問題意識が持てない人の典型的な失敗例だったであろう。また、別の男性係長は、ある日東京へ出張するために新幹線のチケットを手配していた。しかし、出張の当日になって突然大きな声で叫び出した。

「わっ、今日の会議はウチの会議室ではないか！」

会議の日時や場所を間違えるのもあり得ないのだが、自社の会議室

で開催するということは、その男性係長がお客さまを迎える立場なのだ。当然、お茶の手配などの接客準備も必要なのだが、係長がそんな調子では準備が整っているとは到底思えなかった。これが一回、二回の出来事ではなく、毎週のように「わっ」とか「きゃっ」とか叫んでいる姿を見ると、結羽は同じフロアで仕事しているのがだんだん情けない気分になっていった。ちなみに、この二人の係長はヒューマンアセスメントの点数が高く、将来の課長候補に挙げられていると聞くと、ますますモチベーションが下がるのであった。

そのヒューマンアセスメントというものを結羽も受けることになった。これは主任から係長に上がる前に受けなければいけない試験の一つで、普段の業務とは関係のない一般的な業務をやらせてみて、業務処理能力やリーダーシップ、プレゼンテーション力などの点数を付けるものだった。そんなものは普段の業務を見ていればわかるではないか、と結羽は思っていたが、営業課でも企画課でも研究課でも人事評価が不公平にならないように、という大義名分のもと、本音は人事課が社員の点数を付けて昇格の基準にしたいというものであった。試験は二日間に渡って行われたが、五年余り積み重ねてきた業務実績よりも、たった二日間の試験だけで人事評価されてしまふことに結羽は不満を感じており、この試験は受けたくなかった。試験は三つあって、一つは短い時間の中で二五個の案件を処理する業務、一つは職場の問題について五人でグループ討議を行う会議、そしてもう一つは業績不振の会社の経営課題についてその解決策を提案するプレゼンテーションであった。この試験を受けると、業務遂行上における自分の長所・短所がわかるので、意外にも勉強になるところもあったが、日が経つにつれて人事課から「コイツは。点で、アイツは 点だった」という噂が聞こえてくるようになり、すごく嫌な気分になった。結羽は自分に対する他人からの評価を普段から気にしないことにしていたので、自分の点数を自ら聞くことはなかった。

結局、研究課のプロジェクトは失敗し、商品化や実用化にチャレ

ンジする新しいテーマを立ち上げることはできなかった。一方、恋愛の方もイマイチだった。蒲田めぐみへの片想いの恋愛が終わってしばらくは何もなかったが、それではいけないと思い、合コンに参加するようにした。何人かの女性と知り合い、誘われてデートに行くこともあったが、そこは城之内あゆみと行ったことのある場所です。どうしても彼女を思い出してしまうのであった。そして、彼女といったときの方が楽しいと思うことが多く、そう思うと新しい女性とは付き合う気になれなかった。

八の（二） 転職

年が明けて、入社から六年が経とうとしていた。結羽はいつもの年のように近くの神社へ初詣に行った。賽銭箱に小銭を入れ、願い事をするのだが、その年は何をお願いすれば良いのかわからなかった。おみくじを引くと「吉」だったが、むしろその下に書いてある小さな字の方に目が止まった。

「願望…後に叶う」

「恋愛…待て将来吉」

「学問…努力すればよろし」

「就職…頼らず探せ」

「転居…よろし早くせよ」

三年ほど前から執筆している博士論文は、主査・副査の三人の先生からの指導も終わり、月末に行われる公聴会での審査に合格すれば、三月末に博士号の学位を取得できる見込みになっていた。したがって、四月以降であれば、博士号の学位が取得済みであることが応募条件である大学教員への道にチャレンジしても良いのだ。結羽は独身だったので、N市から離れることも特に問題はなかった。慣れ親しんだN市であったが、城之内あゆみのことを思い出してしまふので、かえって外に出るのも良いのかもしれない。いつの間にかN市から離れて、新天地で仕事や恋愛に励む自分を思い描くようになっていった。

それから二週間後、結羽はばーっと学術雑誌を見ていた。結羽が昔やっていた電池関連の記事が出ていたので、懐かしい想いでそれを読んでいた。その記事を読み終え、ページをめくると

「大学教員募集のご案内」

という文字が飛び込んできた。思わず結羽は身を乗り出し、その案内に目をやった。場所はO市にあるO大学で、募集期間は三月末まで。博士号取得者または取得見込者が対象で、研究内容も結羽が興

味を持っている分野であった。結羽はO大学へ行ったことがなかったが、T社の採用試験の時に一緒だった関口がO大学だったことを思い出し、少し懐かしく感じた。早速、封筒と履歴書を買ってきて必要書類を用意した。「これまでの研究業績と今後の研究・教育に対する抱負」という作文が課題に挙がっていたが、結羽は普段から思っていることがあったので、それを文章にした。週末の二日間あれば書類が準備できたので、何の迷いもなく郵便ポストに書類を投函した。

月末になると、K大学にていよいよ博士論文を審査する公聴会がやってきた。公聴会では五名の教授の先生に合格をいただかなくてはいけないのだが、そのうち一人の先生の都合が合わず、その先生には前日に論文内容を説明し、審査を受けた。と言っても、事前に主査一名、副査二名の先生にご指導いただいているので、公聴会で不合格になることはほとんどなく、いわば博士論文のお披露目の会とイベント的な要素が強かった。その日の審査も、いくつかの質問に答えるだけで合格となった。結羽は、翌日の発表に向けて、K市内のホテルで準備しようかと思っていたが、主査の池江教授から

「前祝いになってしまつて申し訳ないが、飲みに行かないか。」とお誘いを受けた。池江教授はどちらかというとさっぱりした性格で、これまで論文以外のことを話すことはほとんどなかった。しかし、折角のお誘いだったので、お言葉に甘えて一緒に飲みに行くことにした。

ホテルに荷物を置いた後に、K市内の小料理店で池江教授と再会した。最初は何を話せば良いのかわからなかったが、先生もT社のことに興味があったらしく、色々なことを聞いてくれた。結羽は、実用化が無理だとわかつている研究テーマでも組織や予算を守るために続いていること、新しいテーマを立ち上げようとしても周りの課長や係長がついてこないこと、博士論文をまとめた電池関連の研究を何故かやらせてもらえないこと、好きな研究をするために大学教員を目指していること、などを正直に話した。すると、池江教授

は、

「Ｔ社は研究所がなくても、これからは営業課が良い商品を調達してそのまま手を加えずに販売する『代理店』に変わっていくんじゃないの。」

と言った。確かにそうなのである。営業課は次々と優秀な社員が育っていて、良い商品を調達できる目利き力を身につけていた。そんな営業課からは「役に立たない研究所」と言われていたのである。先生の言う通り、こんな調子ではそのうち研究所はなくなるだろうし、優秀な社員はどんどん営業課に異動することになるだろう。Ｔ社で研究を続けるためには優秀と認められなくてはならず、優秀と認められない人たちと一緒に仕事をしなければならない、ということになるのだが、そんな条件でモチベーションが上がるはずもなかった。「残念ながら大学教員のポストはないけど、研究員としてなら採用してあげてもいいよ。」

と言ってくれた。しかし、○大学に応募したばかりだったので、「もう少し自分の人生について考える時間をいただいてもいいですか。」

と答えた。先生は黙って頷いてくれた。

翌日の公聴会は、結羽の番の前に国立のＳ研究所に勤めている女性の発表があった。結羽は自分の番が次だったこともあって、その発表をあまり真剣に聞いていなかったが、彼女の発表はよくわからなかった。質疑応答の時間になり、どういう目的でその研究を行ったのか、その研究成果はどのようなところで役に立つのか、などの基本的なことから、何故そのような現象が起こったのか、などの専門的なことまで様々な質問を受けていたが、その女性は上手く答えられていなかった。そのおかげで、質疑応答の時間が予定より二〇分もオーバーし、ようやく結羽の番となった。自分のパソコンをプロジェクタに接続し、いざ発表しようとする、プレゼンテーションソフトが上手く動かなかった。機械というのは、どうしても肝心なときほどトラブルを起こす確率が高いのだろうか。全画面表示にす

ると動かなくなったので、仕方なく少し小さめの画面で発表をすることになった。前の女性が厳しい質問攻めに遭っていたので、少し臆病な気持ちで発表していたが、想定内の質問しか出なかったため、結羽をホツとさせた。公聴会も終わり、無事「合格」ということになった。これによって、三月末に「博士」になることが正式に決まった。

○大学へ大学教員の応募書類を送ってから一ヶ月ほど経った。書類を送ったときは、二月に面接試験があつて、三月に博士号の学位取得と同時に採用が決まつて、四月から新天地で勤務！という勝手な夢を描いていたが、一ヶ月経つても何の連絡もなかった。書類選考で落ちてしまったのかな、と念のため聞いてみると、募集期間が三月末までなので、全てが揃ってから選考を始めるとのことだった。不合格になつていないことに少しホツとしたが、夢の実現が四月以降になつてしまったと思うと少しガッカリした。仕方がないので、合格になつた博士論文を印刷したり製本したりして一ヶ月ほどの時を過ごした。

三月末にK大学の学位授与式に出席することになった。博士号を取得した五〇〇人余りの人に対して、学長が一人一人に学位記を授与するということが、終わるまでに二時間ほどかかる大規模な式典であつた。結羽が学位記を受け取る順番は最後の方だったが、学長から学位記を手渡されると、その学位記を感慨深く見つめていた。これはK大学に三年間通つてようやく手にした学位だった。研究者にとって博士号の学位はその道の第一歩であり、これがないと大学教員の道も開けないのである。大学改革や少子高齢化により大学教員のポストは減少傾向にあり、いくら博士号を持っていたてもポストはなかなか手に入らないのが実情であつたが、とにかく博士号を取得したことでスタートラインに立てたような気がした。

四月に入ると、ようやく○大学から連絡があり、書類審査に合格して、その次の面接試験を受けることになった。面接ではこれまでの研究業績と今後の研究や教育に対する抱負を二〇分間プレゼンテ

ーションするように指示があった。結羽はT社で行った電池関連の研究を紹介し、入社して二年後に取り上げられてしまった研究の続きを是非やってみたいとアピールすることにした。また、研究実績としては大学で長らく仕事をしている人には敵わないかもしれないが、企業経験という強みがあるので、その点を他の人との差別化のポイントとして挙げることにした。

初めて行くO大学は少しわかりにくい場所にあったが、早めに家を出たので余裕を持って着くことができた。面接会場に入ると、同じ研究室と思われる教授、准教授、助教と、他の研究室と思われる教授の四人の先生がいた。先日出来上がったばかりの博士論文を一冊お渡しし、二〇分間のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーション自体は上手くいった。その後、質疑応答があり、教授の先生は結羽の研究に非常に興味を持ってくれているようであった。しかし、准教授や助教の先生からの質問は研究の話はあまりなく、何故T社を辞めてO大学へ応募する気になったのか、というものばかりだった。他の研究室の教授に至っては、O大学の組織や教育方針などについて知っているか、と言われたが、結羽はあまり詳しく知らなかった。その質問には答えられなかった。どうも、七年前のT社の入社試験で業界ばかりを一生懸命読んでいる人たちを思い出し、この先生にはそういう人たちが好印象を持たれるんだろうな、と思った。

面接会場から退室し、家路に着くときの気分はあまり良いものではなかった。今後の研究や教育の抱負を持って面接に臨んだつもりが、T社の話やO大学の組織、教育方針の話が多く、研究の質問をしてくれた教授以外の印象があまり良くなかった。このような人たちと一緒に働いて、果たして楽しいだろうか、という気持ちにさえなってしまった。そういう意味では、七年前にT社の好感度が下がっていったのと同じように、O大学の好感度も下がってしまった。それでも貴重な大学教員のポストでもあり、複雑な気持ちで可否の結果を待つことになった。

八の（三） 転職

材料第二課に異動して一年が経とうとしていた。新しい研究テーマも立ち上げることができず、悶々とした日々を過ごしていたが、年度末には学会で研究発表会が開催されていたので、大学の先生と意見交換するために足を運んだ。やはりT社の社員と話しているより、大学の先生と話している方がずっと楽しかった。

結羽は、ゴールデンウィーク前に川崎部長に突然呼び出された。

「君を材料第一課に戻そうと思っているのだが。」

突然の宣告に、結羽は驚いてしまった。まだ材料第二課に来てから一年しか経っていないのだ。いくら新しいテーマを立ち上げられなかったとは言え、空調関連のテーマを担当して成果を論文にまとめて学術雑誌に発表し、年度が変わったばかりだったので、できるだけ会社のため、世のため、人のために役に立つ新しいテーマを立ち上げる計画を立てていたところだった。しかし、たった一年で部署が変わってしまったてはきちんとした成果が出るはずもなく、やり切れない思いだけが残った。一方、材料第一課で行っている電池のシステム開発は実用化の見込みが全くなかったが、川崎部長や魚谷課長が開発の失敗を認めようとしなかったため、多くの予算が投資されていた。本社の企画課や営業課からは無駄なテーマの代表のように見られていて、完全に呆れられているようであった。そんなテーマでは結羽のモチベーションも上がらなかつたし、電池のシステムが開発には電気や機械の専門家が求められているのであって、材料が専門の結羽が活躍する場はないように思えた。結局、またしても川崎部長に将棋の駒のように使われただけの人事異動だった。

それならばT社を辞めるのはこのタイミングではないか、と結羽は直感的に思った。しかし、次の職場がなければT社を辞めることができなかった。O大学からは面接から二週間経っても可否の連絡はなかった。ここで、公聴会の前日にK大学の池江教授から「研究

員としてなら採用してあげてもいいよ」と言われたことを思い出した。すぐさま先生に連絡し、再びK市内の小料理店で会う約束をした。

池江教授には、材料第一課への異動が確定になったこと、T社では材料開発ができないこと、O大学の教員採用試験を受けたこと、などを正直に話した。池江教授も異動の話は酷いと頷いてくれ、T社では結羽の活躍の場がないかもしれない、というようなことを言った。そして、

「O大学はきちんとしたポストだから受かったらそこに行きなさい、しかし、駄目だったらウチで研究員として雇ってあげるから。」と言ってくれた。池江教授の話は、本当にありがたいものだった。こんなに結羽のことを親身になってくれること自体嬉しかったし、研究員の職まで用意していただいて本当に救われたような気がした。これまでも博士論文の執筆でお世話になったので、恩返しのためにこの先生のもとで頑張ろうと思った。

結局、O大学の教員採用試験は不合格だった。しかし、好感度が下がっていたので、不合格でもあまりガッカリしなかった。むしろK大学の池江教授のもとで研究成果を出すことが夢になっていた。池江教授にもO大学の結果を報告し、研究員として正式によろしく願います、と言うと、池江教授は快く承諾してくれた。

ゴールデンウィークが明けて、T社に退職願を提出した。すると会議室に呼び出され、川崎部長と材料第一課の魚谷課長、材料第二課の遠山課長の三人がいた。そこで、猛烈な慰留工作を受けた。何故辞めるのか、何がやりたいのか、何故電池開発では駄目なのか、次はどこで働くのか、というようなことを延々と聞かれた。結羽は、研究成果を学術雑誌に論文として発表できるような研究がしたいが、T社の方針とはズレがあるので、他のところで働きたい、というように話を話したが、なかなか納得してくれなかった。いろいろ話しているうちに、何故納得してもらえないのかわかってきた。次第に質問が変わってきたからだ。会社を辞めることで周りに迷惑を

かけてないか、異動を発令したばかりのタイミングで辞めるというのは上司の顔を潰すことにならないか、新しい部署で実績を残してから辞めるのが筋ではないか、というようなことを言い出したのだ。結局、部下が会社を辞めると、その上司が人事課から評価を下げてしまうので困るという自己中心的な話だったのだ。この人たちは最後まで自分のことしか考えていないのか、と情けない気持ちになったが、それは余計にT社を辞めたいという想いを強くするだけだった。二日間に渡って一〇時間ほど慰留工作を受けたが、結羽が日本国憲法第二二条に定められている職業選択の自由を主張すると、川崎部長も最後は退職願を渋々受け取った。その後、人事課の常識的な判断によつて異動は取り消され、材料第二課で残務処理を行うこととなった。それが決まると、材料第一課の魚谷課長は何も言わなくなつた。自分の部下にならなくなつたことで、自分の評価が下がることもなくなつたからだ。入社して最初の二年間お世話になり、研究のイロハを教えていただいたので恩に感じていたが、魚谷課長も所詮T社の人間か、と少しガッカリした。しかし、お世話になつた魚谷課長に迷惑がかからなくなつたと思うと、結羽も少し気が楽になつた。部下を将棋の駒のようにしか思っていない川崎部長なんかどうでもよかつたし、材料第二課の遠山課長はT社には珍しく評価とか気にしない人だったので、これで円満にT社を退職できる見通しが立つたのであつた。

慰留工作が終わると、結羽は久しぶりに風邪を引いてしまった。博士号の学位が無事取得できたこと、T社を円満に退職できること、そしてK大学で研究員として新たなスタートが切れることで、今まで蓄積していたストレスが一気に解放されたような気がした。しかし、ストレスから解放され気が抜けたところで、体調を崩すことはよくあることだろう。有給休暇が余っていたので、遠慮なく休むことにして、次への英気を養うことにした。

風邪が治つて出社すると、色々な人から飲みに行こうと誘われるようになった。その頃になると、結羽が退職することは漏れ伝わっ

ていて、何故T社を退職することになったのか、次はどこで働くのか、ということに興味津々といった感じだった。しかし、T社の人たちが知らないところで新しい人生をスタートさせたいという想いがあったので、飲み会の誘いにはお断りすることにした。

一方、人事課から退職の手続き関係の書類が送られてきて、その中に退職理由を書かせる書類が入っていた。一般的には、退職願には「一身上の都合」とだけ書けば良いはずだったが、その書類には転職の場合は転職先を、寿退社の場合は結婚相手の氏名を記載するように、という指示が書いてあった。事務手続き上必要なのかもしれないが、他社で転職した人の話ではそんなことを書かされたことがないということだったので、最後の最後までT社の嫌な面を見せつけられたような気になってしまったのであった。

退職手続きが一段落したところで、母校であるNK大学の恩師や、T社と共同研究をして下さった先生に博士号取得と転職の報告をした。五人ほどの先生にご報告へ行ったのだが、T社を退職することを残念だと言う先生は誰一人おらず、大学で高度な研究にチャレンジする結羽の決意に理解を示してくれた。結羽はそれがとても嬉しかったし、自分の判断が間違っていなかったことを実感した。ただ、大学教員のポストに就いたわけではなかったので不安な気持ちもあったが、これだけ応援してくれる人がいるのであれば、努力次第で道が開けるのではないか、という前向きな気持ちの方が大きくなった。

振り返ってみると、就職活動を含めてT社での七年間は何だったのだろうか。電池や空調関連の研究に三年間従事し、企画課にも三年間在籍した。その間に、大学の先生や他社の人などにお世話になり、海外出張を含めて色々な経験をした。しかし、T社の組織や評価を重んじる官僚的な世界に埋もれ、ストレスの溜まる毎日だった。それは、どこの会社でも同じかもしれない。しかし、他社の人と話す限り、T社は特に異常だった。それでも何とかやっていけたのは、社内恋愛をしていたからだろう。城之内あゆみと付き合った五年間

は楽しかったが、別れてしまつては何も残らなかった。形として唯一残ったのは「博士号」だけだっただろうか。ストレスに埋もれ、自分らしさを全く出すことができなかったT社での人生。それは、結羽にとってまさに「失われた七年」だった。

この小説の一部はフィクションで、基本的には実際の人物・団体・事件とは関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410g/>

失われた七年

2011年10月6日00時22分発行